

大学におけるFDの動向

—本学での取り組みを中心に—

2009 年 2 月

文教大学教育研究所

ま え が き

文教大学教育研究所

所 長 平 沢 茂

昨年度、本報告書の前段となる研究報告書刊行の後、研究所内で研究所としてFDにどう取り組むかの議論を重ねてきた。その中で、他大学の取り組みを見るにつけ、本学でも授業公開に取り組む必要が確認された。

とは言え、いきなり全教員の理解を得ることは不可能であるし、まして、他大学で見られるような全教員の出席を義務化することなどできるはずはない。歩きながら考えようということで、授業研究会の先生方と協力してとにかくコマを進めてみようということになった。このような経緯で、本研究所は、昨年12月1週目に大学授業研究会の協力を得て、授業公開の試みを実施した。

周到な用意の下で実施したと言うよりは、とにかくコマを進め、歩きながら考えようということでもあり、参観者が1人もいないという状況も想定していた。実績を上げることより、次年度以降の展開を考える手がかりを得るという目的を見失わないことに比重をかけたのである。このような趣旨を踏まえて、6人の先生方が、ご自分の授業を公開してくださった。想定していたように、参観者は少なく、参観教員は延べ人数4名、参観者ゼロの授業もあった。

しかし、このような事実をどう克服するか、真の授業改善に向けてどのような取り組みが必要かを考える手がかりを得るためには、良い機会となった。そのために、実施後に、授業を公開してくださった先生方と教育研究所スタッフとの意見交換会を持ち、次に進めるコマの検討をした。その結果、次年度は、研究会のメンバーを中心に、相互に授業参観し、授業研究会を持とうということになった。そのような実践を積み上げつつ、一方で、授業改善の取り組みを学内に報知する工夫をすることで、授業公開を含めた幅広い授業改善の取り組みが全学的に広がることを期待しようということである。次年度の展開等は無理せず、しかし、着実な進展を期して、研究所内でも検討を加えているところである。

次年度以降のことはいずれ、研究所ニュースや研究所年報でもお知らせすることとして、ここでは、今回の取り組みから見えたいくつかの課題を整理しておきたい。

まず第1は、他教員の授業を参観した教員は、そこからなにがしか考えるべき課題を得るに違いないということである。私自身、今回の授業公開でビデオを録画しつつ見せていただいた大島先生の授業から得たものがいくつかある。今、そのことを述べる余裕はないものの、こうした経験は誰もが持つに相違ない。

第2は、参観者が少ない理由についてである。最大の理由は、授業公開、授業改善に

関する教員の意識が、まだ十分ではないということであろう。しかし、もっと、現実的な別な要因もある。たとえば、今回、私が大島先生の授業しか見られなかった理由は、他の授業時間帯に、私自身は別な仕事をしていたということである。自分の授業であったり、事務仕事であったり、と中身は様々であるにせよ、とにかく、物理的な理由で、授業の場に足を運ぶことができなかったということである。

その他、小さな課題はいくつか指摘された。しかし、それらについては、次の報告書でまた、ご報告したい。

この報告書は、今回の試みで授業公開をしてくださった先生方の、授業公開に関するご報告を収録した。併せて、常葉学園大学の全学的な公開授業の様子を参観させていただいたので、その報告を収録した。これらの報告をお読みになって、学内の先生方が、FD＝授業改善について、少しでも関心をお持ちくださるなら、それもまた本学におけるFDの前進に他ならない。

最後に、本報告書において中本先生が指摘されるように、真の授業改善は小手先のスキルアップに留まるのではなく、まさに、大学とは何かを基底に据えた上での、授業の改善でなければならない点を強調しておきたい。この点については、つい先頃刊行された『湘南フォーラム』（文教大学湘南総合研究所紀要）第13号における拙論でも指摘しておいたところである（「梅根悟の大学論から見た大学及びFDの現状と課題」）。

本学の授業改善に関しては、本研究所が刊行する『文教大学の授業』も、授業公開の試みの1つである。こうしたユニークな取り組みにも目を向けつつ、本学の授業改善をどう進めるか、様々なご意見を頂戴したいところである。本報告書もまた、その一翼を担うに足るものであると考えている。

授業公開について

成 田 奈緒子

(教育学部准教授)

1. 科目名、公開日時、教室、対象

科目名：小児保健学（特別支援教育専修 2 年）

および 小児保健学 II（特別支援教育専修 4 年・他）の合併授業（カリキュラム改変期のため）

日 時：2008 年 12 月 2 日（火曜日）二限 437R 教室

2. 科目全体のねらい

将来、特別支援学校／小学校の教員になる、または自ら育児に携わる可能性のある学生たちに、小児の客観的な健康状態の把握のポイントと一般疾患の種類と予防法・治療法について学ばせるのが目的である。

基本的に、受講している学生たちは必修授業として、特別支援学校に在籍する可能性のある児童生徒の障害の原因疾患の種類とその内容についてはすでに学んでいる。

また、小児保健学 I 等の授業をすでに受講済みなので、すでに正常小児の発生と発達についても学んでいる。

本授業はそれらの知識をベースに、障害の原因疾患としてではなく、通常小児期に多くみられる感染症などの疾患群について学習し、さらに日本社会における小児の生活・行政等の現状と問題点についても学ぶことで、現場に出たときの子どもたちの理解をより深めることを目的としている。

シラバスとしては、

- ・バイタルサインの内容と年齢による正常値（実習）
- ・新生児期の異常と疾患（先天異常と奇形・周産期疾患・感染症など）
- ・乳児期の異常と疾患（感染症・乳幼児突然死症候群など）
- ・幼児期の異常と疾患（感染症・インフルエンザ・伝染性疾患など）
- ・学童期の異常と疾患（感染症・けが、ショック、事故等への対応など）
- ・子どもの生活と行政（生活リズム向上へのとりくみ、母子保健行政、予防接種法など）

3. 公開された授業のねらい

本授業では、これまでの授業で学んだ事柄を応用して、事例検討を行った。

与えられた情報から子どもの状態をどこまで把握できるか、また何が残りの情報として必要かを判断し、さらにそれら集めた情報からどのように、どの程度まで子どもの状態を推測できるか、をグループでシミュレーション学習を行うことがねらいである。

はじめに、5～6人ずつのグループに学生を分け、グループごとに机を集めて着席させる。事例1の一枚目の情報と一人3枚ずつの白紙を配布する。5分程度の時間を取り、「事例の情報から推測できること」「事例について必要な情報」などを3点挙げて各自に記述させ、さらに10分程度の時間でグループ内の意見を紙に書かれた内容を整理することでまとめさせる。それぞれの班の発表を聞いたところで二枚目の情報を与え、前回の推測を取捨選択していく作業をグループで進める。最終的には、成田が事例作成の際に想定していた疾患（風疹）を提示し、その根拠を述べてさらに、発疹性疾患についてスライドを用いて復習する。同様に、事例2, 3についてもKJ法を用いた学習を進めていく。（事例2は本児に肥満があることを気付かせる。事例3はADHDに酷似しているが、実際には鑑別を要する疾患が数多く存在することに気付かせることがねらいである）

4. 特に見てほしかったところ

初めは戸惑っていた学生たちが、やり方を把握するにつれ変わっていく姿。

限られた情報からなんらかの推論を導くためには、時に「妄想」を働かせながら、与えられた事例に関して考えられる可能性を多く挙げる必要がある。

さらに、そこに論理的・科学的根拠をつけるためには、これまでの知識を総動員する努力が必要である。この姿を見てほしかったと思う。

5. 授業について自評

用いたのはKJ法であり、最初に与えた情報はわずか数行の事例紹介である。基本的に学生たちの想像や妄想にゆだねる部分が多い。もちろん医学の授業ではないので、医学的に正しいことを導くのが狙いではない。それは、こちらで最後に解説をしている。

なぜ、このような方式の授業を多く取り入れているかというと、私自身が臨

床の場において、教員や親の「思い込み」「想像力のなさ」に困惑している現実が多くあるからである。

現代日本と言うまでもなく情報化社会であり、教員も親も学生も常に知識とマニュアルといった膨大な量の情報に翻弄されている。しかも、その時代に最も「声の大きい」情報にほぼ全員が従ってしまうという日本人特有の現象がある。これはとても危険なことであると、私は常々感じている。

たとえば、中学受験が過熱化している首都圏では、小学校 3～4 年生になれば、「塾に行くのが当たり前」となっている。この裏には、「現行の小学校の授業では受験に必要な知識は獲得できない」「公立中学校に行かせるとエリート街道から外れる」「他の子が皆塾に行っている」という全く科学的ではない偏った情報に踊らされる親たちの姿がある。しかし、9 歳 10 歳の子どもたちが、夜 9 時まで塾で勉強し、帰宅してから復習をして 12 時や午前 1 時に就寝という生活が、小児期の心身の発達を危うくするものである、という科学的に正しい「情報」は受験生を抱える親たちの間では、ほとんど流布していないのが現状である。この大きく偏った情報の渦に塾・家庭教師産業の経済的な思惑が少なからずかかわっていると考えても間違いではないだろう。

そして実際にこのような生活を長く送ってきた子どもたちが、思春期なども相まって心身の変調を来し、外来を受診するケースは多い。ここで私はこの子どもに関わる教員や親たちの「思い込み」に直面するわけである。「教室に入るのが怖いと言っていたって、とにかく登校させて教室に入れることが大事です。それが児童の正しい姿だから」と思い込む教員。「この子は勉強が大好きなので、塾から帰宅してからも、毎晩夜中まで机にかじりついて勉強しているんですよ。でも、わからない問題があるといらいらすのか、髪の毛をひっこ抜いてしまつて・・・」と禿頭（とくとう）状態の子を連れてきて鼻高々（？）の母親。

間違っているのは、知識の内容というよりは、偏りなのだろうと思う。たとえば事例 3 などは、現職教員を対象とした研修会でもしばしば用いているが、発達障害者支援法や特別支援教育の導入により、教員の中で「発達障害」に関する知識は飛躍的に高いため、まず間違いなく「これは ADHD ですね。いますいます、うちのクラスにも」という反応で、すでに「診断」を決め付けている。むしろ学生たちのほうが、情報の細部まで読み込み「もしかして生活習慣による影響なのでは」「母親の愛情不足？」など妄想による広がりを見せてくれる。本事例もそうだが、実際に教員の「診断」により「病院に行つて来なさい」と親が命令され、私の外来にやってくる「ADHD 様」児童のうち、半数近くは実

は「誤診」であることはぜひ覚えておいていただきたいと思います。事例の 2 枚目のシートにも書いてあるように、甲状腺疾患をはじめとする「紛らわしい疾患」が数多く存在する。特に問題だと思うのは、教員による勝手な思い込みにより、その子の学級内の評価が不当に下げられているケースも多くみられる、ということである。

こういう教員、親たちを少しでも減少させたい、という思いがこの授業の根幹的なねらいである。正しい知識を幅広く身に着けるべく公正・公平な目を持つことはもちろんのこと、実際に事例に出会ったときにその子どものみならず家庭や生活にまで広く眼を配り情報を収集できる大人になってほしいと、学生たちに願っている。

6. 授業公開についての感想・意見

今回の試みは高く評価するべきものだと思う。本学には教育熱心な素晴らしい先生方も多くいらっしゃることを知ってはいるが、私自身、他の先生方の授業を拝見できる機会がとても少ないのを残念に思う。今後、授業公開を全学的な慣例として定着させることは、私たち教員の意識を高める上でも、また学生たちにとっても有益なことであると考えている。

事例 1

生後 9 カ月の女儿。

三日前から発疹がみられたが、昨日から急にその数が多くなった。

痒そうにしているような気がする。

Q. この児について詳しく知るためには、さらにどのような情報が必要ですか？

☆女儿の情報

本日 11 時時点で

身長 69.3 c m 体重 7.3 k g

生歯 4 本

体温 37.8 度、 心拍 120 回/分、 呼吸数 40 回/分

本日はミルクを二回（100ml ずつ）飲んだ。離乳食は与えたが食べない。

軽い鼻汁、咳嗽を認める。軽い下痢もある。

3 か月の時から保育園に通っている。

予防接種歴は DPT2 回、BCG、ポリオ二回は済んでいる。そのほかは未接種。

事例 2

かずおくんは小学校二年生、7歳の男児です。

かずおくんの小学校では、6月に運動会があります。今年も5月から運動会の練習が連日行われてきました。

かずおくんは、5月27日（金）に行われた運動会の予行演習の日、学校を欠席しました。お母さんから電話連絡があり「腹痛を訴えているのでお休みします」とのことでした。

その後は朝、登校班に間に合わず、始業ぎりぎりにお母さんと一緒に登校する日が続きました。

6月5日（日）に運動会の本番がありました。かずおくんは開会式の終わったところにやっと登校しましたが、運動会の種目は全部出ました。

その後、振り替え休日のあと6月7日（火）はかずおくんは欠席でした。翌8日（水）、9日（木）、は登校しましたが、10日（金）はお休み、その後13日（月）、14日（火）、17日（金）、20日（月）、21日（火）、と欠席が目だってきています。欠席の日には毎朝お母さんから「腹痛」あるいは「頭痛」ということで休ませてほしい、との連絡がはいります。

☆春の健康診断でのかずおくんの検査の結果です。

身長 125 c m 体重 48.5 k g

虫歯 4 本（内 2 本治療済み）

視力 右 0.2 左 0.2 眼鏡使用にて左右とも 1.0

聴力検査 異常なし

尿検査・蛭虫検査 陰性、異常なし

予防接種 年齢相当のものは終了

☆以下は担任が把握しているかずおくんの特徴です。

性格 おっとり型だが、几帳面、完璧主義的な部分も併せ持つ性格。

気が弱く、積極的に発言をするタイプではない。

成績 中の下 体育は不得意、工作は得意だが時間がかかる。

家族 両親（公務員の父、専業主婦の母）と妹（幼稚園年長）

友人 積極的に友人を作るタイプではない。1年生のときに親しかったただ一人の友人がクラス替えで違うクラスになった。新学期が始まってからこれまでに目立ったクラス内でのトラブルはないように思う。

担任は母親を学校に呼び、家でのかずおくんの様子を聞きました。

その結果、運動会の練習が始まってから、6人組で行う障害物レース（最後に6人そろって走ってゴールする）のときに、自分が走るのがとても遅いためにグループの足を引っ張ってしまうことをとても気にしていた、ということがわかりました。グループの中にもあからさまにかずおくんが同じグループであることをいやがる児童がいて、「かずおが休めば、早い子を入れて勝つことができるのに」と言われたりしていたそうです。予行演習の朝は、本当にひどい腹痛が起こり、下痢が何回も出てトイレにこもりっきりとなり、学校に行けなかったそうです。

運動会が終わってからも、体育の授業に出るのが嫌だと思い続けていたためか、体育のある日の朝に限って、本当に腹痛や頭痛が起こったそうです。

事例 3

症例：OH 小学 2 年生 男

既往歴：2 歳ごろから熱性けいれんあり。5 歳のときにてんかんを疑われ脳波の検査をするが異常なし。言語発達はやや遅かったがめだつほどではなかったという。運動発達は正常範囲内。

学校での様子：

小学校入学時よりたびたびクラス担任から「落ち着きがない」ことを指摘されていた。一年生の後半より、授業中に立ち歩く、興味のない授業のときには隣席の子にちょっかいを出す、友人と口げんかになるとすぐに激昂して暴力をふるってしまう、などの問題行動が目立ってきたため、両親は何度も呼び出されていた。成績は中位以下。

家での様子：

家族は父（エンジニア）、母（パート勤務）、姉（小学校 5 年生）と本人の 4 人暮らし。テレビゲームを非常に好み、幼稚園のころから、操作を覚えてのめりこんでいた。放課後の友人たちとの遊びもゲームがほとんどで、自宅に集まりみんなでゲームで対戦することが多い。そういう場面で本人が負けると極端に悔しがり、パニックのようになることもある。母はそんな本人を「怖い」と感じることもあるという。

来院：

小学校からの要請を受けて「落ち着きがない」ことを主訴に来院。

外来の診察室に入ってきててもゲーム機を離さない。受け答えは散漫。

神経学的所見、画像診断で異常なし。田中ビネー検査で IQ86。

血液検査で、Free T3 7.5 pg/ml (正常 2.3-4.3pg/ml)、Free T4 3.4ng/dl (正常 0.9-1.7ng/dl)、TSH 0.002 μ IU/ml 以下 (正常 0.5-5 μ IU/ml) と甲状腺機能亢進が認められ、バセドウ病と診断される。

メルカゾール 5mg/day より治療を開始し、次第に授業中の落ち着きのなさが減少した。

ADHD と鑑別を要する疾患・病態

1. 視覚異常
2. 聴力異常
3. 甲状腺機能異常
4. 糖代謝異常
5. アレルギー疾患
6. 慢性副鼻腔炎
7. 不安障害
8. 気分障害 など

「授業公開」の取り組み

米 津 光 治

(教育学部准教授・教育研究所研修部主任)

はじめに

いうまでもなく FD（ファカルティ・ディベロップメント）は、教員の授業内容と授業能力の向上を目指すものである。このことは教員に必要であることは理解していても、決して容易なことではない。私自身、中学校教員としての授業経験はあるものの、大学における学生に対する教え方について、特別の教育を受けたことはない。結局、自分の経験則から私が教えを受けた先生の授業の良いところを取り入れたり、学生の反応を見ながら自分なりの工夫をしているに過ぎない。激しく変化する社会への対応や山積する教育課題の解決を迫られている学生が必要とする教育を提供するためには、個人的な努力には限界があり、個々の教員が他の教員と協力しつつ、授業内容と授業方法を結びつけた授業改善を考える必要があると考える。

今次の授業公開では、以下のように2講座の授業を公開した。

I 「運動技能実習Ⅱ」

1. 実施要領

- ① 日 時 平成 20 年 12 月 2 日（火）3 限
- ② 場 所 体育館（グラウンドコンディション不良のため）
- ③ 対 象 教育学部 3 年生（学部共通）

2. 授業の概要

本講座は、小学校の教科体育の内容を各運動領域の特性を踏まえた指導法を中心に「模擬授業」を実施しながら授業を展開する。受講生が教師役となり、模擬授業を担当するが、教師役になった受講生には担当時間の前に事前指導を行う。授業はクラスに分れ、それぞれ2種目を受講する。

小学校体育の運動領域のうち、器械運動、陸上運動、ボール運動、表現運動を取り扱い、春学期（体育科技能実習Ⅰ）・秋学期（体育科技能実習Ⅱ）それぞれ2領域を開設しており、受講生には年間を通して4領域を履修することを勧めている。

① 授業の全体計画

表1は、本講座の授業の全体計画である。授業の最初にオリエンテーションを設

け、クラス分けと授業の進め方、指導案の作成等について説明する。

受講生をAグループ（陸上運動）とBグループ（表現運動）の2グループに分け、7回の模擬授業を実施後、グループの運動領域を交替する。毎時間3名の学生が教師役となり、学生全員が1回は教師役を行う形式で行なう。

表1 模擬授業の全体計画

回数	学習内容・活動	Aグループの模擬授業	Bグループの模擬授業
1	オリエンテーション（授業の進め方、担当分担、指導計画の作成の仕方等）		
2	模擬授業①	「運動遊び」の指導	表現運動の指導
3	模擬授業②	「基本の運動」の指導	表現運動の指導
4	模擬授業③	「短距離走」の指導	表現運動の指導
5	模擬授業④（本時）	「ハードル走」の指導	表現運動の指導
6	模擬授業⑤	「走り幅跳び」の指導	表現運動の指導
7	模擬授業⑥	「リレー」の指導	表現運動の指導
8	模擬授業⑦	「走り高跳び」の指導	表現運動の指導
9～15	グループを交替して上記の模擬授業を実施		

② 模擬授業の進め方

ア オリエンテーション

- ・ 単元計画、指導案（様式を提示）に必要な事項
- ・ 授業時間の1コマの流れ
- ・ 授業担当者の決定

イ 指導案の作成及び事前指導

ウ 模擬授業

1コマで、3名の模擬授業を行う。授業時間は25分とし、指導案は45分で作成する。教師役以外の学生全員が児童役になり、各授業後に表2の「模擬授業評価表」を記入し、授業について協議する。

[授業の流れ]

- ・ 用具等の準備
- ・ 模擬授業担当による本時の説明

- ・準備運動（1 時間目を担当する者が行う）
- ・模擬授業
- ・授業者自評及び全員でのディスカッション
- ・教員からの指導及び講評

3. 本時のねらい

本時は、陸上運動の 4 回目の授業で「ハードル走」を取り上げた。

「ハードル走」は、ハードリング技術とハードル間のインターバル・リズム走が中心的な学習内容となるが、走りながらハードルをまたぎ越すという技術は難しいだけでなく、ハードルに対する恐怖感を抱く児童は多い。したがって、指導者の授業の展開の仕方が学習内容の習得を大きく左右する。

表 2 模擬授業評価表

授業日 月 日 授業者

学籍番号

氏名

下の質問について、あてあまるものに○を付けてください。

次元	項目	質問事項	評価
成果	感動の体験	深く心に残ることや感動することがありましたか	3・2・1
	技能の伸び	今までできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか	
	新しい発見	「あっ、わかった」と思ったことがありましたか	
意欲・ 関心	精一杯の運動	精一杯、全力を尽くして運動することができましたか	
	楽しさの体験	楽しかったですか	
学び方	自主的学習	自分から進んで学習することができましたか	
	めあて学習	自分のめあてに向かって何回も練習できましたか	
協力	助け合い学習	友だちと互いに教え合ったり助け合ったりできましたか	
	協力的学習	友だちと協力して仲良く学習できましたか	

3は「はい」、2は「どちらでもない」、1は「いいえ」

4. 特にみてほしかったところ

本時は、模擬授業を通して小学校体育科における授業実践のための基礎的な能力及び授業実践上の問題解決能力の育成とともに、体育科教育学の理論の理解をねらいとしている。これらは、受講生自らが計画・実施及び参加した模擬授業を振り返ることを通して、その達成を図るものであり、特に、以下のような授業実践上の問題解決能力の獲得が達成されているかどうかを評価していただきたいと考えた。

- ① 単元を構成する能力（単元構成能力）

- ② 教材を開発できる能力（教材開発能力）
- ③ 準備・片付け等の授業をマネジメントできる能力（マネジメント能力）
- ④ 授業中に起こる多様な事柄に適切に対処できる能力（臨床的実践能力）
- ⑤ 自らの授業を多様な視点から振り返ることのできる能力（反省的実践能力）

5. 授業について自評

計画では、グラウンドで実施する予定であったが、前日の雨でグラウンドコンディション不良のため、急遽、体育館での実施となった。学生には、実際の学校現場もそうであるように、さまざまな要因で計画通りに進められない場合があるので、必ずバックアッププランまで考えておくようオリエンテーション等で指導している。提出した指導案とは違う授業の進め方に、少々とまどいながらも授業担当の学生はそれぞれ創意工夫した模擬授業を展開してくれた。

模擬授業の終了後の検討会では、実際に授業案を作成して授業を担当した教師役の学生、学習者役として授業を受けた学生が、それぞれの役割から得た経験を振り返りながら、評価表に基づいて、その原因や今後の改善点を具体的に検討することを通して、授業を反省的に振り返る能力の育成が図られたものと考えている。

授業を展開するには、非常に多くのことを考えたり、決定することが求められる。例えば、計画立案の段階では、どのような指導の仕方で単元を展開するか、教材、学習形態、学習資料等はどうするか、という問題がある。また、施設・用具などの学習環境等についてもあらかじめ知っておかなければならない。授業がはじまれば、どの学習者を観察し、フィードバックを与えるか、安全面での配慮はもとより負傷などの突発的な問題への対応、計画と実際の授業のズレへの対処等、その場で即座に決定しなければならないことが多々ある。さらに、授業後には、授業計画の修正など、次の授業改善に向けた取り組みも必要である。

このような授業を実施するときに生じる多様な問題を解決できる能力は、自らの実践を振り返ることによって高めることができる。授業で生じる問題を見つめ、理解し、それに向き合うことを通して高めていくことができると考える。

来年、3年生は、改訂学習指導要領に基づいて、教育実習に臨むことになる。教育実習は大学の学習の集大成であり、どの学生にとっても大きな緊張を伴うものであるが、こうした模擬授業の体験から、今後の体育科教育に意欲的に取り組む学生の育成が重要であると認識している。来年度から、新カリキュラムにより、「運動技能実習」が「体育科教育Ⅱ」と名称を変更し必修授業となる。今後、一層の授業の充実改善を図り、学生の指導に当たりたい。

Ⅱ「基礎演習Ⅱ」（学校教育課程）

1. 実施要領

- ① 日 時 平成 20 年 12 月 3 日（水） 1 限
- ② 会 場 432 教室
- ③ 対 象 教育学部 2 年生（学部共通）

2. 授業の概要

「基礎演習Ⅱ」は、「基礎演習Ⅰ」で修得した主体的に学習・研究・発表を行うための基本的な手法の上に立って展開される授業である。より専門的な課題を自ら発見して調査・研究・実験・フィールドワーク等を行い、その結果を発表して討論することによって、実践的な知の技法を体得、する併せて、この探究の過程を通して将来教員になるための幅広い教養を身に付けることを目的として新カリキュラムで開設された授業である。

講座の開設に当っては、1 年生の秋学期にクラス選択オリエンテーションを実施し、授業担当者の授業内容を説明した上で、学生の希望を出させてクラス分けが行われる。本年度は、初めての実施ということもあって、担当者会議の開催からクラスの決定に至るまで、運営委員の先生、教務委員会の先生方の苦労も大変だったと思われる。第 1 希望で 83 名、うち自専修の学生が 29 名という希望者だったこともあり、人数の調整をお願いしたが、教授しやすい人数、専修に調整していただき、この場をお借りして感謝申し上げたい。

① 授業の全体計画

表 3 は、本講座の授業の全体計画である。

子どもの規範意識の低下やコミュニケーション能力が問題となり、そうした原因の一つに子どもの「遊び」の変化が指摘される中、本授業では、「子どもにとっての『遊び』の意味を考える」ことをメインテーマに、ミニ卒業論文の作成を通して、研究の進め方、考え方を身に付けることをねらいとした。

② 授業の進め方

子どもの「遊び」と関連して各自が研究テーマを設定し、参考文献の収集・紹介、研究方法や調査用紙の検討・作成、論理的な文章の書き方などを学び、中間発表などを経て、B4 版 1 枚に抄録形式でまとめ、提出することをゴールとした。オリエンテーションの際、過去の体育専修生の卒業論文抄録集を配布し、論文作成のイメージをもたせた。

授業の展開に当っては、30 名の学生をグループに分け、授業の課題に沿ってグループ内でのディスカッションを重視した。専修を超えたクラス編成であるため、

学生同士、本授業ではじめて顔を合わせる者やこれまで会話したことがない学生もみられた。そこで、授業の進行に沿って、グループ編成を2回行い、その都度、グループワークやピア・サポートプログラムを活用した活動を取り入れ、対人関係能力のトレーニングなども取り入れた。学生同士が協力し合える人間関係を構築し、「ともに学び、ともに成長」できるよう配慮した授業展開を心掛けた。

評価のために、各学生にクリアフェイルを配布し、感想文、評価表、研究に向けて収集した資料等を入れるよう指導し、ポートフォリオ形式で評価ができるようにした。

表3 「基礎演習Ⅱ」の授業計画

回	学習内容・活動	授業の課題
1	オリエンテーション	授業の進め方、授業計画を理解する。「ごちゃまぜビンゴ」
2	子どもの「遊び」を考える	子どもにとっての「遊び」の意味、問題点を考える。
3	論理的な文章を書く	論理的な文章の書き方を理解する。
4	「遊び」を知る・体験する	体育館で「遊び」をグループごとに紹介・体験する。
5	研究テーマを決定する	研究テーマ、目的、仮説、研究方法を検討する。
6	グループワーク	6人×5グループ、「バンガロー殺人事件」に挑戦する。
7	研究目的・方法の検討中間発表会	グループで発表し、代表者による発表会を行う。
8	文献を紹介する	各自の参考文献を紹介しあう。
9	調査用紙の作成	調査対象、項目、用語等について検討する。
⑩	中間発表会（本時）	グループで中間発表し、代表者による発表会を行う。
11	論文の書き方を学ぶ	研究論文の書き方について理解する。
12	発表会①	口頭発表を行う。
13	発表会②	抄録に基づく発表会を行う。
14	抄録提出	

3. 本時のねらい

本時は、前時までには各自の研究テーマ、研究方法に沿って調査用紙を作成したことを踏まえた中間発表会を実施する。

グループごとに、表4の「中間発表」評価表を用いて、各項目について各自の研究の進捗状況や研究の妥当性や結果の考察、授業最終日までに抄録完成を目指し、今後の見通しなどを確認することをねらいとした。

表4 中間発表 評価表

学籍番号

氏名

下の質問について、あてあまるものに○を付けてください。

発表者（ ） 研究テーマ（ ）		
項目	質問事項	評価
研究目的	研究目的が明確になっていますか。	3－2－1
研究方法	研究の方法は、目的に沿った研究法になっていますか。	3－2－1
参考文献	研究テーマの解決に必要な文献が集められていますか。	3－2－1
語句や定義	用語の統一や語句の定義が明確になっていますか。	3－2－1
客観的表現	調査結果が図表などで客観的に表現できるようになっていますか。	3－2－1
研究資料	文献以外の資料の妥当性が吟味されていますか。	3－2－1
調査用紙	質問事項はよく検討されていますか。	3－2－1
	回答者にとって難解な用語などが使われていませんか。	3－2－1
	選択肢は回答しやすく用意してありますか。	3－2－1
	集計表やコンピュータの利用も考慮して作成されていますか。	3－2－1
計画性	研究の見通しは適切ですか。	3－2－1
プレゼン	研究に関するプレゼンテーションはよくわかりましたか。	3－2－1

「はい」は3点、「どちらでもない」は2点、「いいえ」は1点

4. 特にみてほしかったところ

授業がスタートした頃は、挙手や意見発表も遠慮がちで、グループでの意見交換も消極的であった学生が、最近は分からないところがあると「先生！」と声をかけて、グループ内の討論も積極的に質問するなど授業中気軽に質問できる雰囲気が生まれてきた。テレビゲームの功罪も、ややもすると子どもの成長にとってマイナスの部分が論議されるが、テレビゲームの教育への活用といった視点での論議もあり、学生の柔軟でみずみずしい感性に感心することも多い。時には学生の日常生活の情報が耳に入り、学生のインフォーマルな部分に触れつつ、学生指導のきっかけとなることもある。

学習意欲を引き出し、学生が主体的に学ぶための授業づくり、授業方法の改善は、大きな課題であると考えている。自分なりには気をつけていても教員の一方的な「教える授業」になりがちであり、学生の学習意欲を高めることができているか不安を感じることもある。この解決法の一つとして、講義の中に体験的な学習を組み入れ

ること、体験し、実感することで「教える授業」から「学ぶ授業」への転換が可能となり、また、学生との対話や反応の把握も容易になると考えた。

授業中の学生の姿を通して、こうした授業の「しかけ」が学生の授業への興味を喚起し、学習意欲の向上につなげることができているのか、参観者にみてほしいと考えたところである。

5. 授業について自評

卒業論文は、学生にとってはいわば大学での勉学のしめくりであり、大仕事であるが、2年生にとっては、まだまだ先の他人事のようなものである。しかし、卒業年次に入ってから急にあわててやろうとしても、我々の学生時代よりもはるかに多忙である現在の学生には到底十分な研究は期待できない。毎年、体育専修生の論文指導を行なっているが、内容は高いレベルのあるのに、論文原稿は稚拙な点が目立つという傾向が散見されることも事実である。

鋭い観察眼、小さな現象の変化にも疑問を持つ探究心、あるいは科学的な思考や正確な文章表現などは、急に身に付けようと思ってもできないものである。卒業論文作成に向けて、授業を通してこうした姿勢を養うとともに、興味を喚起し、学習意欲を高める「基礎演習Ⅱ」が担う役割は大きなものがあると再認識した。

授業のねらいを達成するために、どのような授業を計画し、展開することが効果的であるか、授業公開の実施は、担当する授業をあらためて見直すよい刺激となり、授業への動機付けとなった

大学における授業を担当して感じていることは、学生の学習意欲の低下と学生間の能力差である。学習意欲を引き出し、学生が主体的に学ぶための授業づくり、授業方法の改善は、大きな課題であると考えている。自分なりには気をつけていても教員の一方的な「教える授業」になりがちであり、学生の学習意欲を高めることができているか不安を感じることもある。この解決法の一つとして、講義の中に体験的な学習を組み入れること、体験し、実感することで「教える授業」から「学ぶ授業」への転換が可能となり、また、学生との対話や反応の把握も容易になると考えている。

今後さらに、教育効果を高めるためには、「基礎演習Ⅱ」の授業担当者同士の実質的な連携も必要であり、緊密な情報交換のもとに、互いの授業の中で生かされ、応用できる能力を養うことも重要な課題であると考えている。

授業公開に関する報告書

－「視点」を使った物語教材の分析－

大 島 丈 志
(教育学部専任講師)

1. 科目名、公開日時、教室、対象学生

教育基礎演習 A、2008 年 12 月 3 日（水）、134 教室
教育学部・学部教養科目、秋学期、3 年生、70 名

2. 科目全体のねらい、シラバス等

【科目全体のねらい】

教育基礎演習 A は、国語科に関する基礎的事項を学ぶことを目的としている。具体的には、以下の 3 点を中心に、教師としての指導力の基礎となる言語能力を養い、参加者の読み、自己表現の能力を深めることを目標として授業を進めていく。

- (1) 詩教材・作文の指導法を学ぶ。
- (2) 音読・朗読の指導法、教師の範読の方法を学ぶ。
- (3) 代表的な物語教材を使って読みの方法を学ぶ。

【シラバス】

将来国語の授業を行うための基礎的な能力を育成することを目的とした科目である。前半講義、後半演習の形式である。また授業開始後 10 分程度を使い、教員採用試験対策の小テストを行う。

1. 授業のガイダンスー授業の内容について。授業に関するアンケート。
2. 詩教材に関しての基礎的事項を学び、詩教材を自ら分析・鑑賞できる能力をつける。
3. 作文教育に関しての基礎的事項、作文指導の方法を学ぶ。また資料を用いて作文を作成する方法を学ぶ。
4. 小学校から高校までの代表的な国語教材を使用し、音読・朗読・範読の技術を養う。グループ活動を通じて役割読み等の読みの方法を学ぶ。
5. 学習指導要領における文学教材のありかたについての解説を行い、特に読む

ことに関する学習指導要領上の知識をつける。

6. 国語教育、特に物語教材について読みの基本的事項を学ぶ。物語の分析方法を学び、物語教材の読みを行う能力を養う。●授業公開時
7. 小論文の書き方についての基礎的事項を学ぶ。国語科のみならず教員採用試験等でも課せられる小論文の作成法を、作文との違いを明確にしながら学ぶ。

＊毎回の授業の開始 10 分程度を使用して、教員採用試験対策の小テストを行った。

内容は漢字・ことわざ・国語常識・四字熟語・文学史等の過去問題等である。

＊評価は出席状況・発表内容・提出物等を総合的に判断する。

＊テキストは毎回教師が資料を配付する。参考書等は授業中に指示する。

3. 公開された授業のねらい、内容

【授業のねらい】

本時の授業のねらいは、物語教材を読むにあたって必要な物語の分析方法の一つ、「視点」の役割を学ぶことにある。さらに国語の定番教材を使用して、「視点」を用いて作品の分析が行えるよう演習を行った。

【方法】

前半の講義部分と後半の演習部分に分け、知識の理解した上で、さらに実践するという構成で行った。

前半の講義部分では、「視点」の種類・役割等の講義を行い、後半は学生自らが教科書教材を使いながら演習を行い、物語における「視点」の問題について実践的を通して理解できるようにした。

【内容】

(1) 小テスト (10 分)

教員採用試験対策として、教員採用試験レベルの文学史の小テストを行い、基礎知識の確認を行った。間違えたもの、解答できなかったものに関してはノートに書き写させ、学生自身で後にフォローするよう指示を出した。

(2) 物語の分析方法に関する講義 (35 分)

○題名について

物語を読む上で看過しがちな、物語のタイトルの持つ役割、効果についての解説を行った。

○作者について

物語の主人公がイコール作者である、という誤解は、小中高通じて、児童・

生徒に見られる傾向である。登場人物、特に語り手と作者は異なる存在であるということを解説した。さらに宮沢賢治の例などを用いながら、作者について論じるということは、読者主体の創造的行為であることを解説した。

○語り手について

作中でお話を語っている人（存在）を語り手（または、語り）と呼び生身の作者とは区別する必要があることを解説した。

○「視点」（語り手の位置）について

「視点」の位置によってその作品の性格が決定付けられることについて、私小説、古典作品、絵本等の具体的な作品を利用しながら講義を行った。解説した「視点」は以下の通り。

一人称視点 語り手は一人称の登場人物に寄り添う。一人称の登場人物の見たもの、心理等が描かれる。

例) 私小説 告白小説

三人称限定視点 語り手は三人称の特定の登場人物に寄り添う。特定の登場人物の見たもの、心理等が描かれる。多くの小説に見られる「視点」

三人称全知視点 語り手は複数の登場人物に寄り添う（出入りする）。複数の登場人物の見たもの、心理等が描かれる。

例) 古典的物語

三人称客観視点 語り手は人物の行動のみを描写し、心理は描かれない。

例) 幼年向け作品

次に、「視点」を知ることの重要性を以下の4点にまとめて解説した。

- i) 「視点」によって物語の性質を分析することが出来る。
- ii) 「視点」に変化があったときは場面の変化がある。作者の意図的、もしくは無意識の操作の可能性はある。読者が「視点」の変化に注意して考えることで、作品の理解が深まる。
- iii) 児童・生徒にとっては、言葉そのものに鋭く着目する訓練となる。「言葉の力」を身につけさせる訓練となる。
- iv) 児童・生徒に登場人物の心情を読み取らせるためには、教師が誰の心理か理解すること、教材研究として「視点」の理解が大切である。

(3) 教科書教材「ごんぎつね」を使っの演習（35分）

国語の定番教材である新美南吉「ごんぎつね」（『国語 はばたき』4下 光村図書）を使い演習を行った。

まず、「ごんぎつね」の黙読を行い、その上で、「ごんぎつね」の「視点」とは何か、「視点」が変化する場所とその効果についてワークシートに記入させた。

学生が記入し終わった時点で解答・解説を行い、さらに非常に細かい部分だが重要な「視点」の変化があることを指摘、その発見を学生に行わせた。以上の演習を通じて「視点」の役割・変化により発生する効果、その上での物語の読みを理解させた。

(4) 物語作品における「視点」の変化の役割とその効果についてのまとめ(10分)

最後に学生の到達度の確認を行うためにワークシートを回収した。このワークシートは出席確認も兼ねている。

4. 参観のポイント

前半の講義部分では、多くの学生にとって始めて知る言葉の可能性のある「視点」という概念をいかに分かりやすく理解させるかを工夫した。出来るだけ具体的な作品を例として挙げ、学生への質問や、理解度の確認をしながら講義を行った。

後半の演習部分では、「ごんぎつね」という定番教材を使用することで、学生に将来自らが授業する立場になって考えるという意欲の喚起を行った。

「視点」の変化とその効果に関する理解度、作業の進行度は学生によって大きな差があるため、ワークシートが早い段階でおわってしまっている学生には、さらにもう一点「視点」の変化があることを指摘し、集中力が持続するよう工夫した。

また、作業が進まない学生に対しては個別に対応し、講義の内容を振り返らせる、ヒントを与える、読む部分をしばらくさせるなどの支援を行った。

5. 授業についての自評

物語教材における「視点」の役割を学ぶという本時の目標については、回収したワークシートの分析から、多くの学生が到達できていると考えられる。ただ、一部の学生に、「視点」の変化という概念自体が理解できていないという様子が伺えた。この問題に関しては、次回の講義の中で、板書の形でフォローを行った。

今回の授業では、出来るだけわかりやすく解説することを工夫したのであるが、やはりまだ分かりやすさという点での徹底が出来ておらず、学生の理解度をさらに上げるために今後も研鑽を積んでいきたい。

6. 授業公開について

私自身は大学授業研究会に開始当初から参加させてもらっており、他の先生方の

授業方法を学び、自分の授業を改善させることには強い興味を持っている。また、実際に大学授業研究会で自ら発表し、他の先生方の発表を聞くことで強い刺激を受けている。

授業公開の試みは、授業におけるテクニックや時間の使い方、学生との距離の問題など教師にとって学ぶべきことの多い貴重な機会だと考える。

今回の授業公開では時間の都合で他の先生方の授業を参観することは出来なかったが次年度は多くの授業を参観し自らの授業のヒントをもらえればありがたいと考える。

今後は、徐々に参加者を増やしながら、緩やかに授業公開の試みを拡大していくのがよいのではないかと思う。

最後に私の授業についてご意見を下さった先生方に感謝をしたい。

「総合演習」および「教職概論」の 授業公開に関する報告と考察

手 嶋 將 博

(教育学部准教授・教育研究所研究部主任)

はじめに

2008（平成 20）年 12 月 4 日（木）、文教大学教育研究所 FD 研究の一環として、筆者は 4 限目の「総合演習」および 5 限目の「教職概論」の授業公開を行った。これらの 2 つの科目を選んだのは、第 1 に、それぞれが大学の授業の中で大きな比重を占める「演習」と「講義」という異なる形式の授業形態を持つ科目であるため、第 2 に、「総合演習」は 30 名前後の小規模クラスの科目であるのに対し、「教職概論」は、毎年 100～150 名前後の学生が履修する大規模クラスの科目、という対比を念頭においたためである。本稿ではまず、各科目に関して、科目全体のねらいやシラバス等の概要、公開した授業の内容とその時間のねらい、参観のポイント、授業に関する自評等を述べていく。そして最後に、全体のまとめとして、FD の一環としての授業公開に関する私見を述べることとする。

I 「総合演習」

1. 授業の概要

科目名：総合演習（秋学期・木曜・4 限）

公開日時：2008（平成 20）年 12 月 4 日（木）

教室：13402

対象学生：教育学部 3 年生（34 名）

2. 本科目のねらいおよびシラバス

「総合演習」は教育学部教職科目に属する演習科目である。1997（平成 10）年の「教育職員免許法の一部を改正する法律」および「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」の施行に伴い、新たに大学の教職課程に導入された科目である。

この科目は、「人間尊重・人権尊重に基づき、地球環境、多文化共生や国際理解等人類共通の課題、少子高齢化と福祉、学校や地域、家庭のあり方等我が国の社会全体に関わる課題について、受講者各自が理解を深めその視野を広げることを目標としている。具体的には、受講者が、体験的・問題解決的な学習、ディベート、パネルディ

スカッション等、さまざまな方法及び技術を用いて、自ら問題点を見出し、情報を集めて調査・研究を行い、それらを分析・検討して、主体的に課題に取り組む姿勢や、深い洞察力・思考力・分析力、さらには自己のあり方・生き方を考えられる力を身につけることが到達目標である。

本科目のシラバスは、およそ以下のようになっている。

- I. 総合演習ガイダンスー総合演習の意味と目標／授業概要・方法の解説／発表班分け・発表日程決定（1／15回）
- II. 学習課題の設定(1)ー課題の設定・研究方法に関する話し合い（I）・キーワード、関連事項の抽出・提示・序列化（2／15回）
- III. 学習課題の設定(2)ー課題の設定・研究方法に関する話し合い（II）・担当教員によるヒアリング・関連事項の検討・整理と研究内容の焦点化（2／15回）
- IV. 課題の研究ー情報収集(各班、課題の内容に合わせて方法を工夫する)／調査・研究／実験・観察／分析・結論付け／発表内容およびプレゼンテーション方法の検討／発表資料の作成／プレ発表…各班の研究概要の中間報告（2／15回）
- V. 課題のまとめー発表(各担当班による発表)/ディスカッション(全体討論)／相互評価(発表班に対しての教員および聞き手の学生たちによる評価。評価用紙に評価および意見等記入後回収し、各評価項目の数値は教員が集計、記述意見部分は各発表班がまとめて意見一覧を作成）（8／15回）
- VI. ファイナルレポート提出（各担当班に発表時の反省と、集計された評価・意見一覧等を元に、発表内容を加筆・修正して最終レポートを完成・提出）

こうしたシラバスに基づき、本演習は以下のような形式で進められる。

- ① 授業のガイダンス時に各々4～5名のグループ（8班程度）に分かれ、最初に各班の扱う諸問題のテーマ（例：環境教育、情報モラル、国際理解、障害理解、性教育、食育、キャリア教育、裁判員制度、言語活動、理数離れ、道德教育、安全教育、小学校英語、等）について各班話し合いにより担当や発表日程を決定。
- ② その後、各テーマについて、班による課題の設定・研究方法に関する話し合い、情報収集／調査・研究／実験・観察／分析と発表資料の作成を行っていく。
- ③ 各班で研究テーマや目的・方法等がまとまったら、担当教員（手嶋：筆者）が班ごとにヒアリングし、必要に応じて指導・助言を行う。
- ④ 研究の進捗状況を報告するために、中間発表として「プレ発表」（各班発表・質疑応答計20分ずつ）を行い、他の受講生の質問や意見を聞きながら、自分たちの研究を修正していく。
- ⑤ プレ発表後に、各班1コマずつの本発表となるが、発表担当班は、必ず発表前（1

週間前～2日前)に担当教員(手嶋)のところに発表用レジュメを持参(又はメールでファイル提出)し、発表計画に関して、事前指導・助言を受ける。

- ⑥ 研究発表および質疑応答・ディスカッション(全8回)…毎回、各班が研究テーマに基づき、授業の前半を使って発表(40～45分)。発表では、通常の研究発表のプレゼン以外に、研究テーマを学校現場に関連させた「模擬授業」の形式を用いてもよい。その場合、指導案の作成時は、自分たちが課題として調べたテーマをどのようにとらえて、実際の指導に結びつけているか、ということが分かるように、「単元設定の理由」や「指導観」、学期あるいは年間の授業の流れも想定した「全体指導計画」等も併せて作成させ、受講者が行う授業の、全体計画における位置づけや意味を明確にする。
- ⑦ 発表した内容は、担当教員および発表班以外の受講者(「フロア」と呼ばれている)により「発表評価用紙」(資料1)に従って評価され(10分程度)、授業の後半(30分程度)はそれらを基に質疑応答やディスカッションを行う。
- ⑧ 発表班は演習終了後、フロアの受講者全員が記入した評価用紙を回収し、教員に渡す。教員は評価用紙の数値評価をまとめて「総合演習評価表」(資料2)を作成し、翌週、発表班に評価用紙とともに渡す。
- ⑨ 質疑応答時には、フロアの受講者の個々の発言回数は「総合演習発言表」(資料3)に“正”の字を書き込んで記録され、発表時以外での授業への取り組みの姿勢を見る。
- ⑩ 全ての発表班は、学期末の指定された日時までに、発表したレジュメをベースにして最終レポートを「最終報告書作成要領」(資料4)に従って作成する。その際、発表評価用紙に書かれた自由記述の意見を、項目番号ごとに箇条書きにまとめ、また、発表班の全員が各自、一連の研究を行ってみて、①難しかったこと、②新たに分かったことを追加・添付し、全部を綴じて教員まで提出する。

続いて、本科目の評価方法であるが、班単位による研究・発表の評価を元にして、出席状況、課題への参加・取り組み、意見交換等といった授業への姿勢・意欲を重視した個人別評価を加味する。評価基準は出席による授業参加(発言・質問回数等を含む)10%、課題設定・調査・発表準備等(取り組む姿勢・態度、協力度、事前相談等)および研究発表(発表方法、レジュメ等の工夫、質疑応答等含む)40%、発表後、修正・加筆を加えた最終レポート提出(各班毎)50%、の各項目について評価した結果を総合判定する。研究発表・レポートの成績の評価基準は、AA)形式に不備がなく研究・発表内容が優れている。A)形式に不備がなく研究・発表が適切である。B)形式は満たしているが、研究・発表内容においてやや不足である。C)研究・発表内容いずれも若干

の難点がある。D)研究・発表の内容において課題がこなせていない、となっている。

すなわち、「総合演習」は、担当教員と参加学生との協働によって運営される性格のものであり、現代の世界や日本の社会に関わるさまざまな課題について広く関心を持ち、自ら課題を設定して調査・研究し、それらを分析・検討してプレゼンテーション等の学習活動を行うことによって、知的好奇心・問題解決能力を高めるために極めて有効な実践的学習の場となりうるものであるといえる。

3. 公開された授業のねらいと内容、参観のポイント



図1：「総合演習」の発表の様子

今回の授業公開は、全15回の13回目、本発表・全8回の第6回目で、家庭専修の学生6名から構成されている班による「食生活の乱れ」とその改善をテーマとした発表を中心としたものである。今回の班の発表は、発表レジュメの枚数A4サイズで22頁（B4片面に2頁ずつ、両面コピーで6枚）におよび、印刷資料以外にも、パワーポイントで食生活に関する小学生と大学生へのアンケート

結果の報告・分析、さらに、文教大学の学食の弁当を実際に食器や皿に盛り分けて、普段の身近な食生活にひそむ栄養バランスの偏りをグラフ化し、その具体的な改善策を述べる、といった興味深い発表であった。（図1）普段、学食で売られている弁当の栄養バランスを目に見えるデータにしてみる、というアイデアは、事前指導における教員と発表班との話し合いの中で出てきたものであり、そうした栄養の偏りを毎回の食事に一品加えることで出来る限り簡単に補うにはどうしたらよいか、という具体的な改善策まで含めた発表に昇華したのは、発表班の工夫の成果であったといえる。その結果、フロアの学生たちによる発表評価の総合点は、全8回の発表の中で最高点である合計44.4点、平均4.0点を記録した（5点満点）。

4. 授業の自評

基本的に「総合演習」の本発表は学生主体で進行されるため、教員の活動は、主に発表前の準備支援等の事前指導として行われる。その後、実際の授業の開始時から発表開始までの進行、発表中の評価用紙への記入、発表終了後フロアが評価用紙に記入

している間（約 10 分）の発表班への事後指導、後半の質疑応答時のフォロー、および、最後のまとめでのクラス全体への話、という、いわゆる「裏方」に徹する形になる。したがって、今回の授業のねらいとしては、発表班が「食生活の乱れ」およびその改善策に関する研究成果として、どのようなプレゼンテーションおよび質疑応答を行うことができ、フロアも適切な質問や意見の交換が行えるか、ということがポイントになるし、一番見て欲しい所もそのようなパフォーマンスが適正に行われているかどうか、という部分であった。

なぜなら、「総合演習」においては、教員は発表班の研究・発表のファシリテーター（水先案内人）であるため、発表班のプレゼンテーションや質疑応答が適正に行われているかどうかは、すなわち、教員の助言・指導という支援活動が適正になされているかどうかの評価の指標となるためである。

そうした意味で言えば、今回の発表の評価が非常に高かったことは、学生たち自身の課題解決力や発表に関わる様々な技術も向上が見られたし、教員側による支援も効果的に行えていたということで、一定の成果をあげることができたと考えられる。

もちろん、毎回必ずしも発表が成功に終わるとは限らず、事前の打ち合わせの段階で発表テーマが絞りきれていない発表班や、プレゼンテーションの仕方がいまひとつで、フロアから「何を研究したのか目的が絞れていない」「ただ資料を読むだけになっていた」等の辛辣な評価を受ける発表班も、過去 6 年、春・秋学期合わせて 15 クラスの 120 組を超える班の中には、少なからず存在している。発表班の研究への取り組み方（姿勢）や、発表時点でのプレゼンテーション力の不足もその原因であるといえるが、それは同時に、教員がそのような班に対して十分な助言・指導が出来ていなかったということの証左でもあり、その都度、反省すべき点であるともいえよう。

過去 5 年間（03－07 年度）の学生による授業アンケート「総合演習」（年度内に 2 ～ 3 コマ担当）の授業評価をみると、「全体として受けて良かった」の評価項目では、年度順に、03 年度…3.7／4.4（以上春学期）／4.6（秋学期）、04 年度…4.9／4.8（以上春学期）／4.7（秋学期）、05 年度…4.3（春学期）／4.7（秋学期）、06 年度…4.6（春学期）／4.9（秋学期）、07 年度…4.5（春学期）／4.3（秋学期）という評価であった（08 年度は秋学期開講のため、09 年 2 月 5 日現在データ集計中）。この数値自体が他の「総合演習」と比べて高いのか低いのかはわからないが、この授業だけで見ると、1 年目（03 年度春学期）の 1 コマを除いて全て 4 点台である。他の項目も殆ど 4 点台のため、これらの数値だけから見ると学生満足度は高いといえるのかもしれないが、項目によっては「講義」と「演習」で質問の仕方を変えないと正確な意識調査にならないようなものもある。

例えば、現行アンケートの Q9「視覚教材（板書を含む）、音声教材等の補助教具の使用が効果的だった」等は、学生が行う発表でのプレゼンテーションのことを指すのか（だとすると班によってさまざまである）、最初の数回で教員が各班のテーマ決定等のための説明に対して用いたことを指すのかが分からないので、こうした項目には教員が補足をしないと、学生は各自のイメージで「学生のプレゼン」に対してか、「教員の説明に」対してかを判断して回答してしまう。そもそも「演習」では、教員が前面に立って知識や技術を伝えていくような「講義」的な場面は少なく、むしろ学生の研究・発表をバックアップしていく立場であるので、どこまでを“授業評価”の対象として見るのか、学生の方からは非常に分かりづらい。こうしたことから、やはり「演習」科目用のアンケートを別途作成する必要があるといえよう。

5. 「総合演習」に関する私見

「総合演習」はいくつかの異なる専修の学生が、グループ同士による発表やディスカッションを通して、受講者の「探究的学力」の向上を目指すことに大きな意義があると思われる。しかし、2006（平成 18）年 7 月の中央教育審議会答申を経て、2008（平成 20）年 11 月 12 日の「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」公布（平成 21 年 4 月 1 日施行）および「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令及び教員免許法更新制の実施に関わる関係告示等の整備について（通知）」によって、本学でも、新たに 4 年次秋学期に導入が予定されている「教職実践演習」と、早ければ 2010（平成 22）年には差し替えが行われる予定となっている。

同じ演習科目でありながら、現代社会におけるさまざまな課題の研究を通して、学生の「探究的学力」の育成をめざす「総合演習」と、教職に就く直前に、各学生の教員としての責任感や資質をみるという、いわゆる「職能」の最終確認ともとれるテクニカルな側面に主眼が置かれている「教職実践演習」は、その趣旨も目的も異なり、本来代替的に扱われる類のものではない。

今後は、現在（2008 年度）の 1～2 年生が履修している「教育基礎演習Ⅰ」「教育基礎演習Ⅱ」といった科目に、「総合演習」的な要素（専修の枠を超えたグループ研究活動、課題意識に基づく主体的な「探究的学力」の涵養、プレゼンテーション能力の向上、等）を入れていく等の工夫によって、それらの間隙を埋めていくことが求められるであろう。

Ⅱ「教職概論」

1. 授業の概要

科目名：教職概論（秋学期・木曜・5限）

公開日時：2008（平成20）年12月4日（木）

教室：13401

対象学生：文学部（日文・英文）2年生（140名）

2. 本科目のねらいおよびシラバス

「教職概論」は文学部教職科目(中学校・高等学校一種)であり、また、教育学部においても教職の必修科目である。この科目もまた、「総合演習」同様、平成10年の「教育職員免許法の一部を改正する法律」および「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」の施行に伴い、「教職の意義等に関する科目」として、新たに大学の教職課程に導入された科目である。

本学では、基本的に春学期の必修教職科目である「教育原理」とセットで履修するように設定されており、火曜3限の教育学部1年生対象の「教職概論」のクラスも107名と、いずれも大教室・大人数での講義形式の授業である。ちなみに、この時間（木曜5限）は、春学期の「教育原理」（文学部2年）において、高大連携の一環として、越谷西高校の生徒が1名聴講しており、09年度はこれに加えて、秋学期の「教職概論」でも高校生を聴講生として受け入れることになっている。

本科目では「教職とは何か」という点を中心に進め、教職の意義および教員の役割、教員の職務内容（研修、サービス及び身分保障等を含む）についての認識を深めるとともに、さまざまな課題に直面している学校や教員のあり方について理解を深め、進路選択に資する各種機会の提供等を行う事を通して、「教職」についてより深く考えられるようになることが到達目標である。すなわち、「教職」に就こうと考えている者が、自分自身と深く向き合い、「なぜ自分は教員になりたいのか？」「どのような教員になりたいのか？」「そのためには何が必要とされているのか？」等について、さまざまな角度から考えながら、自分の将来の進路をしっかりと定めることが目指されている。いわゆる「教職に関する基礎知識」を獲得する側面と、受講生自身の「進路決定」の側面を併せ持った科目である。

大人数であるため、教員による講義が中心となるが、必要に応じて資料に関連した文献、記事、VTR等を取り入れ、また、授業の単元の終わり等の節目毎に受講者にミニ・レポートを書かせて学生の理解度を測ったり、講義した内容に関する学生それぞれの意見等のレスポンスを取ったり、といった形を取り入れ、なるべく一方通行にな

らないように工夫をしている。

本科目の授業シラバスは以下のようになっている。

0. 授業ガイダンスー教職の意義と目指す教師像

I. 教員の仕事ー教員の日常と職務内容

II. 教員の身分保証と服務義務

III. 幼児・児童・生徒の発達課題と近年の傾向

IV. 様々な問題行動と対応の原理ーいじめ・不登校・学級崩壊・暴力行為等

V. 学校・家庭・地域社会の役割と連携における教師の役割

VI. 教員に求められる資質能力

VII. 教員のライフステージと研修制度ー生涯学習社会における教師の成長

VIII. 新学習指導要領と「知識基盤社会」に求められる学力

IX. 現代社会における諸課題と教員の役割

X. まとめ・教職に対する適性と進路選択

授業の 評価基準は、出席点（単に出席だけではなく、講義への取り組み方等関心・意欲・態度を含む）30%、期末レポート 70%という得点配分で評価する。期末レポートは、講義で解説した内容や配布した資料に基づき、自分の目指す教師像、教員としての資質の形成、教育課題への対応、進路選択等について、知識・情報の理解力や論理性等を評価している。成績の評価基準は以下の通りである。AA)形式に不備がなく内容が特に優れている。A)形式に不備がなく出題意図に応じた内容である。B)形式は満たしているが、内容がやや不足である。C)形式・内容とも若干の難点がある。D)課題がこなせていない。

3. 公開された授業のねらいと内容、参観のポイント

今回の授業公開は、全 15 回の 13 回目にあたり、「VII. 教員のライフステージに応じた研修制度」に関する講義である。ここでは、前回の「VI. 教員に求められる資質能力」で取り上げた、資質能力を高めるために必要不可欠とされる教員の現職研修が、どのようなシステム・内容において実施されているのかについて、(1) 初任者研修、教職経験者研修、管理職研修、長期社会体験研修等の現職研修の現状、(2) 教員のライフステージと研修の関係、(3) 新しい現職研修体系の事例としての東京都のキャリアアップ研修などを紹介・説明するという内容であった。（「教職概論」資料参照）

今回の講義の内容は、教員としての研修制度に関する基礎知識であるとともに、教員のキャリア形成について受講生に主体的に考えさせるねらいがあり、本科目の期末レポートにおいて、「教員のライフステージに応じた研修制度」について考えてまとめ

させるという課題に関連したものである。

授業の展開としては、前半のさまざまな現職研修の現状については、A4 用紙 10 枚（B4 片面に 2 頁ずつ、両面コピーで 3 枚）に及ぶ資料レジュメに沿って説明を行い、後半の教員のライフステージについては、印刷資料に加え、文部科学省や東京都のホームページを参照して作成したパワーポイントによる図解を用いて説明を加えた（紙数の関係で以上の資料レジュメ等は省略する）。準備されたそれぞれの資料に基づき、教員研修の現状と教員のキャリア形成、ライフステージを学生に主体的に考えさせようとするあたりが参観のポイントである。

4. 授業の自評

今回の授業については、内容が非常に多く多岐にわたっていたため、どうしても教員側からの情報の伝達に終始しがちだったことは否めない。資料は毎回、基礎知識とともに、最新の情報を取り入れるなど充実させるように配慮しているが、その一方で、資料が充実していると、それらをもらっただけで受講している学生は半ば安心してしまいう傾向があるので、資料に書かれていない事例なども説明に取り入れて、授業への集中力が途切れないようにした。しかし、後半パワーポイントを用いてより詳しい説明をしたものの、ミニ・レポートを配って、学生に意見や自らの考えを書かせる時間までは取れなかった。

すなわち、今回の授業を単体で見ると、その時間のねらいを十分に達成できていたかどうかを検証することは十分出来なかったといえる。

ただし、先にも述べたように、今回の授業のテーマである教員の研修とライフステージに関する内容は、例年、期末レポートにおいて課題のひとつとして出題しているため、1 月下旬の講義終了後に提出された期末レポートを採点することによって、どの程度学生たちが今回の授業を理解していたかを知ることが可能である。

参考までに、過去 5 年間（03－07 年度）の学生による授業アンケート「教職概論」（木曜 5 限・文学部対象）の授業評価では、「全体として受けて良かった」の評価項目で年度順に 4.5、4.7、4.7、4.8、4.8 という評価であった。

5. 「教職概論」および大人数での講義に関する私見

「教職概論」はいわゆる大人数を対象にした講義形式の授業であるため、さまざまな面での制約がある。

例えば、出欠席の確認ひとつとっても、140 名を超える受講者相手に悠長に出席簿を読み上げて返答させていては、それだけで 10 分以上の時間が掛かってしまう（一

人5秒×140人＝700秒≒12分)。座席指定でもないため、毎回違うところに座る学生140名超を、週1回の顔合わせだけで、顔と名前を一致させることは不可能である。その結果、1年目第3回の講義から、専修別に2つに分けた出席簿のコピーを回す方式に変え、授業の途中で随時ミニ・レポートを課すなどして、出席者の確認に努めている。

また、講義中に指名しても、広い教室では指名された者の声が通りづらいので、ワイヤレスマイクを持って行って回す形になる（ない教室は厳しい）。結果的に、どうしても前の方に座っている受講者とのやりとりが多くなることが多い。

授業環境の面でいうと、教室によっては、スクリーンが窓と反対側にあるため外光で見づらい（カーテンも手動）とか、黒板の前にスクリーンが下りてくるとか（パワーポイントやDVDと板書の併用が困難）、教室の大きさの割に黒板が小さいために後方に座ると見づらい（どこに座るかは個人の自己責任の部分もあるが、必修科目で人数が多いため、やむなく後ろに座らざるを得ない場合もある）などの「使いづらさ」が校舎の新旧に関わらず存在する。このあたりについては、授業担当者に指導上の工夫を求めるのであるならば、教室環境の整備・改善は可及的速やかになされるべきであろう。

Ⅲ まとめにかえて－授業公開のあり方について

今回、初めて授業公開に参加させて戴いたが、やはり期間が1週間だけでは、教員相互の授業を参観したくても物理的には難しかった。空き時間に他の教員の授業を見ようと思っても、実際にはどうしても自分の仕事を入れざるを得ない状況が生じる場合が多い。こうしたことも鑑みて、今後、FDを意識した授業公開や授業評価をより有効なものとするためには、およそ以下のような改善点が挙げられる。本稿のまとめにかえて、これらの項目を覚え書き的に列記しておくことにする。

- ① 相互に参観しやすいように時間割の調整をする。例えば、3人位でグループを作って互いの授業を必ず見て評価するなど、の工夫をする。
- ② 授業公開の期間自体をもっと長くし（最低でも2～3週間程度）、春学期と秋学期それぞれに実施、など、物理的な機会そのものを増やす。
- ③ 録画したビデオをライブラリーにして、時間のあるときに見られるようにすると良い（ビデオの公開には、授業者の了解・学生のプライバシーの考慮が必要であるが）。常葉学園大学（静岡県静岡市）では、各授業を10分にまとめたビ

デオを学内 LAN で流して講義の概要がわかるようにしている。

- ④ むしろ、自分の授業がどう評価されるか、人の授業を以上に、教員が求めているものは、他人の授業で「何かを参考にできるか」（大人数授業での出席の取り方、配布資料、板書、パワーポイント、DVD（VTR）、テキスト等の使い方、ミニ・レポートや授業内課題の活用の仕方、大人数／中人数／小人数の授業での学生とのコンタクトの取り方や受け答え方、等）であり、授業公開のために特別なことをするのではなく、互いの持つ情報や工夫を交換し合える場として行けるとよい。
- ⑤ 授業評価のアンケートで、「演習」「講義」「実験」「実習」を、全て一律で同じ質問項目にするのは無理がある。別々の項目内容を設けての実施が必要である。
- ⑥ 授業で使う教室環境の改善も FD の要素である。
- ⑦ FD は教員や授業だけの問題ではなく、「大学の教育の質をどうするか」ということなので、職員も授業公開や授業研究会に参加できる全学的な体制を早急に整える必要がある。

「教育心理学」授業公開について

中 本 敬 子
(教育学部専任講師)

1. 科目名、公開日時など

公開した授業は、教育学部学校教育課程の必修科目（1年次）の「教育心理学」である。公開日時は12月11日（木）5限、教室は通常通り12号館12101教室（階段型大教室）であった。履修者は全部で130名であり、この日の出席者は120であった。

2. 科目全体のねらい、シラバス等

この科目は多くの受講生にとって初めて心理学に触れる機会となるため、心理学的な観点から、教育や子どもの発達を捉えていくための基礎知識や考え方を講義形式で身につけることを目的としている。シラバスは表1の通りである。

表1. 「教育心理学」シラバス

授業概要
子どもは学校生活を通して、様々な知識を獲得し、学習への意欲を高め、社会性を身につけ、成長していく。教育心理学は、そのような教育実践を支援するために役に立つ知見や方法、技術を提供する。前半は、人はどのような条件でどんな風に物事を「知っている、分かる」ようになっていくのか、子どもはどのような過程を経て発達していくのかといったように、学習、発達に重点をおいて進めていく。後半は、個性・個人差を考慮しながら教えること、学級という集団の特性と教師の役割などについて学んでいく。
授業計画
教育心理学とは何か 知識の獲得過程（1）記憶の仕組み 知識の獲得過程（2）様々な知識と問題解決 知識の獲得過程（3）学習理論から見た学びの仕組み 知識の獲得過程（4）学習の動機づけ 発達のメカニズム（1）発達の捉え方 発達のメカニズム（2）知能の発達 発達のメカニズム（3）人間関係と人格の発達 教授方法と個性・個人差（1）様々な教授方法 教授方法と個性・個人差（2）個性・個人差を生かした教育 学級という社会の特性（1）子どもの人間関係 学級という社会の特性（2）教師と子どもとの関わり 軽度発達障害と指導上の配慮
評価方法
小テスト（3回程度）、授業末に提出する感想カード（出席チェックを兼ねる）、期末テストによって総合的に評価する。

3. 公開した授業のねらい、内容

公開した授業は、「学級という社会」というタイトルで、前回の授業から引き続き、教師と児童・生徒間の関係や児童・生徒同士の社会的相互作用についての基礎的事項を理解させることが狙いであった。授業はおおむね下記の内容で構成されていた。

- 16:20～16:35 小テストの実施
- 16:35～16:45 今回使用するプリントとリアクション・ペーパーの配布
前回のリアクション・ペーパーへの回答と前回の復習
- 16:45～17:45 講義（集団規範と同調行動、集団の構造を把握する手法）
- 17:45～17:50 リアクション・ペーパーの記入・回収

4. 特に見てほしかったところ

公開授業ではあったが、通常の授業と異なることは何も行っていない。ただ、この科目は、履修者数が多いこと、講義中心であること、心理学という大学に入ってから初めて接する学問領域であること等を考慮し、下記のような工夫を行っている。

① パワーポイントの利用とレジュメの配布

授業はパワーポイントを使用して行っている。教育心理学の講義では、実験や調査の結果などを示すことも多く、図表などを視覚的に呈示したいためである。また、講義で取り扱う内容が多岐にわたるため、授業の速度を上げたいという理由もある。また、パワーポイントのハンドアウトはすべて受講生に配布しており、受講生には口頭での説明をプリントやノートに書き込むように指示している。また、授業で使ったパワーポイントのファイルは学内のネットワークドライブにアップロードし、受講生が随時入手できるようにしている。

② リアクション・ペーパーの活用

出席確認もかねて、リアクション・ペーパーへの記入を求めている。使用しているのは、B6 罫線入りの用紙である。リアクション・ペーパーへの記入は必須ではなく、白紙での提出も認めているが、毎回何も書かずに提出する受講生はあまり多くはない。リアクション・ペーパーに書かれた質問などは、次回の授業のはじめに取り上げて答えるようにしている。大教室での授業は教員からの一方向になりがちだが、リアクション・ペーパーによって双方向性を保つことができている。また、授業の最初にコメントを返すことによって、前回授業の復習を兼ねることもできる。

③ ゲーム的要素の取り入れ

5 限、大教室、講義科目という条件もあるため、ともすると受講生の集中力が

とぎれがちになるため、ゲーム的な要素を取り入れる工夫を行っている。たとえば、記憶の仕組みについての回では数字や人名をいくつ覚えられるかを実際に試してみたり、達成動機や自我同一性地位についての質問紙に回答させたりといったことである。

④ 小テストの実施

本科目では、学期中に 3 回程度の小テストを実施している。小テストは、授業開始時に 12 分程度で解答可能な量であり、すべて客観式のテスト項目（正誤問題ならびに空所補充問題）で構成されている。小テスト受験時には、自筆ノートやプリントなどの持ち込みを許可している。小テスト実施のねらいとして、それまでに授業で取り上げた事柄について基本的な事項が理解できているかどうかを確認することだけでなく、学生がノートやプリント等を整える機会になることがある。本授業では授業で使用しているパワーポイントのスライドをプリントとして配布していることから、それでテストへの対応が十分と考え、受講態度に熱意が見られなかったり、ノートをあまりとらない学生が見受けられる。しかし、パワーポイントの資料をその場で読むだけでは解答できないように小テストを構成し、結果をフィードバックすることで、学生自身が自らの受講態度を見直したりノート取りの必要性を実感したりする機会を与えることができると考えている。

5. 授業についての自評

リアクション・ペーパーの記述内容から考えると、本授業に関しては、同調行動の性質やソシオメトリなどの基本概念を理解させ、さらに学級経営などに関連づけて考えさせることに、それなりに成功したのではないかと考えられる。しかし、ペーパーへの書き込みが非常に少なく授業に興味を持てなかったと考えられる者や基本概念をやや誤解していると思われる者がいたため、次回の振り返り時にフォローする必要があった。また、資料等の配布に手間取ってしまい授業がだれた場面のあったことや、私語をする学生への注意が必ずしも適切でなかったこと等の反省点もあった。

6. 授業公開についてのコメント

多くの場合、大学教員は、教員としての訓練を受けることなく教壇に立つ。以前に比べれば、FD に関するシンポジウムやワークショップなどが盛んに開催されるようになってきているとは言え、自分以外の教員が実際の授業を行っているところを見る機会はさほど多くはない。そのため、自分が大学生だった頃に受けた授業を思い出し

つつ、他者の話から得た着想や我流の工夫を試行錯誤しながら取り入れて授業を作っているというのが現状なのではないだろうか（少なくとも著者はそうである）。そんな中、限られた期間・限られた授業とはいえ、本学部で授業公開を行ったことは価値のあることであったと思われる。

他の教員の授業を参観することによって期待できるのは、大きく分けて授業の内容に関するものと授業方法に関するものに分けられるだろう。前者に関しては、初年次教育科目等のように取り扱うべき内容自体を模索しながら授業を構築している段階で特に必要とされるものであり、実際に他の教員の授業を見ることはもちろん参考にはなるが、それ以上に既に同趣旨の授業を実施している他学部や他大学から情報を得ていくことが大切になろう。

後者に関しては、授業を参観することで資料の配付方法、出席の取り方、学生の理解度の評価方法、学生の集中力の保たせ方などに関する他教員の工夫を知ることができると考えられる。もちろん、授業の方法に関する情報を得る手段は、公開授業の参観だけではない。たとえば、池田他(2001)や杉江他(2004)等の書籍や、「授業をどうする！」の原著者の一人 Davis, G. B. のホームページ(<http://teaching.berkeley.edu/bgdl/>)には、授業デザインに関する具体的な工夫や実際の事例が数多く掲載されており参考になる。しかし、実際にどんな授業が良い授業であるかは、学生の気質や授業の規模に依存する部分が大きいいため、同じ学部にも所属する教員の授業から得られる情報は非常に有意義なのではないだろうか。

最後に、FD 活動に関する私見を述べる。授業公開を含めて、FD 活動を推進することは非常に重要である。しかし、FD の根本にあるのは、「より良い大学教育を達成すること」であろうし、そのためには、大学教育とは何か、どうあるべきなのかに関して、大学や学部全体で考えを深めていく必要があるように思われる。大学のあり方が問われている今、本学でも授業テクニックの交換に留まらない FD 活動が行われることを期待する。

参考文献

- Davis, G. B., Wood, L., & Wilson, R. C. (1983). A Berkeley Compendium of Suggestions for Teaching with Excellence. University of California, Berkeley (香取 草之助 (監訳) (1995). 授業をどうする！—カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集 東海大学出版会)
- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹 (2001). 成長するティップス先生：授業デザインのための秘訣集 玉川大学出版部
- 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ (2004). 大学授業を活性化する方法 玉川大学出版部

「教育心理学概論」授業公開について

会 沢 信 彦

(教育学部准教授)

1 科目名、公開日時、教室、対象

- (1) 授業名 教育心理学概論
- (2) 公開日時 2008 年 12 月 5 日 (金) 1 時限
- (3) 教室 1 3 2 0 2 教室
- (4) 対象 教育学部心理教育課程 1 年生 (必修) 104 名 + 2 年生 (再履修) 2 名
計 106 名

2 科目全体のねらいと内容

本科目は、心理教育課程 1 年生を対象とした必修の専門科目であり、幼稚園および小学校の課程認定を受けた教職科目ともなっている。

科目設置の本来の趣旨は、文字通り、教育心理学の全般にわたって概論的な内容を講義することなのであろうが、筆者は実際には、「学習」「動機づけ」「パーソナリティ」「教育評価」の領域を中心に扱った。なお、教育心理学の重要領域の 1 つとされる「発達」については、学生たちは 1 年次春学期に「乳幼児の発達心理学」を履修していることから、割愛している。

参考までに、各回の主なトピックは以下の通りである。

<第 1 回>

- * オリエンテーション
- * グループ分け① (後述)
- * グループワーク (後述)
 - ① 簡単な自己紹介
 - ② 秋学期の抱負

<第 2 回>

1 教育心理学とは

- (1) 教育心理学の定義
- (2) 教育心理学の研究法

<第3回>

2 学習

(1) 学習とは

<第4回>

2 学習

(2) 連合論①

* レスポンデント条件づけ、オペラント条件づけのメカニズム

<第5回>

2 学習

(2) 連合論②

* レスポンデント条件づけ、オペラント条件づけの応用

<第6回>

* グループ分け②（後述）

2 学習

(3) 認知論

(4) 社会的学習理論

<第7回>

2 学習

(5) 学習から「学び」へ

3 動機づけ

(1) 外発的動機づけと内発的動機づけ

<第8回>

3 動機づけ

(2) 動機づけの諸理論

<第9回>

3 動機づけ

(3) 原因帰属

(4) 達成動機

<第10回>（本時）

3 動機づけ

(5) 遂行目標と達成目標

(6) 学習性無気力

(7) 動機づけに関する研究論文紹介

<第 11 回>

＊ グループ分け③（後述）

4 パーソナリティー

(1) パーソナリティーとは

(2) 類型論①

＊ 血液型と性格

<第 12 回>

4 パーソナリティー

(3) 類型論②

＊ クレッチマーの類型論とユングのタイプ論

(4) 特性論

<第 13 回>

4 パーソナリティー

(5) 精神分析のパーソナリティー理論

(6) パーソナリティーの形成

(7) パーソナリティーの理解

<第 14 回>

5 教育評価

(1) 教育評価の歴史

(2) 教育評価の目的

(3) 教育評価の方法

(4) 教育評価の技法

3 公開された授業の流れ、ねらい、内容

(1) 本時の流れ

まず、本時の流れを時系列的に示す。(なお、時間については記憶を頼りにしているので実際とは多少のずれがあるかもしれないことをご承知おきいただきたい。)

① 8:59 教員入室

② 9:00 出席カードおよびプリント配布

③ 9:03 挨拶（「では始めます。いつものようにみんなで挨拶しましょう」などと声をかけてから、午前中であれば「おはようございます」、午後であれば「こんにちは」と、まず筆者が挨拶する。続いて学生が唱和するのだが、ここで学生から元気の良い挨拶が帰ってくるとやはり気分がよい。)

- ④ 9:03 グループワーク：前回の授業から今日までに起こった印象的な出来事を語る（後述）
- ⑤ 9:08 グループワーク：前回の復習（後述）
- ⑥ 9:10 前回の出席カード紹介（後述）
- ⑦ 9:15 本時の授業内容開始
- ⑧ 10:25 本時の授業内容終了、出席カード記入
- ⑨ 10:30 授業終了

(2) 本時のねらいと内容

当日は、「動機づけ」の最後の部分を扱った。

「動機づけ」の全体を通して、将来教育や保育の現場で活かすことのできる、動機づけに関する教育心理学の主要な研究成果を伝えることをねらいとしている。言うまでもなく、この講義を通して、学生には児童・幼児を適切に動機づけることのできる教育者・保育者になってほしいという願いからである。さらに、下記④においては、教育心理学の研究の一端を紹介することを狙いとした。

本時の授業内容（上記(1)⑦）については、以下のような流れで行った。

- ① 配付資料Aを参考に、「遂行目標」と「学習目標」の概念について説明した。
- ② 配付資料Bを参考に、「学習性無気力」の概念について説明した。
- ③ 「学習性無気力の身近な例」について、グループで話し合わせた。
- ④ 配付資料Cをもとに、動機づけに関する最新の研究を紹介した。

なお、配付資料Aは、中澤潤（編）『よくわかる教育心理学』（ミネルヴァ書房、2008年）の44・45ページ「学習目標：やる気を支える目標」のコピー、配付資料Bは、同書40・41ページ「学習された無力感：自分でできるという気持ちの大切さ」のコピーである。それぞれ出典を明記した上で授業開始時に配布した。また、配付資料Cは、『教育心理学研究』第56巻2号（2008年6月）に掲載された論文、安藤史高・布施光代・小平英志「授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響」（pp.160-170）のコピーを授業途中に配布した。

なお、配付資料AおよびBについては、付録として掲載する。

4 参観のポイント・授業についての自評

筆者（会沢）の実践上の工夫と課題について以下に述べる。

(1) グループ学習の導入

大学授業におけるグループ活動の導入については、既に数多くの実践が報告されているところである。特に、グループ活動を活かした大学授業について体系的に実践と

研究を積み重ねているのが、協同学習である（例えば、Johnson, Johnson & Smith, 1991；杉江・関田・安永・三宅, 2004）。

Johnson, Johnson & Smith (1991) によれば、協同学習には以下の5つの基本要素が必要であるという。

- ① 互恵的な相互依存関係の構築
- ② 対面的で促進的な相互交流の保障
- ③ 個人のアカウンタビリティーの確立
- ④ 社会的技能の育成と活用
- ⑤ 協同活動評価の実施

さらに、これらの要素を満たした協同学習の成果に関する数多くの研究が行われているが、それらは3つのカテゴリーに大別できるという。

- ① 達成への取り組み（努力）
- ② 協調的な人間関係
- ③ 心理面の健康

筆者も協同学習に若干の関心を抱き、ワークショップや学会（日本協同教育学会 <http://jasce.jp/>）に参加したりはしていたものの、これまで特別に協同学習による実践は行ってこなかった。しかし、2008年度秋学期は、思い切って本科目と「学校カウンセリング」（3年次対象教職科目、4クラスを担当）の計5科目で、協同学習を意識した、グループ活動を取り入れた実践を行ってみた。なお、筆者の実践は上記の協同学習の5要素を満たしてはいないため、協同学習とイコールではないことを付記しておく。

具体的には、以下のような授業形態である。

- ① 教員によるグループ分け

教員が4人（一部5人）のグループ（第1次グループ）を編成し、グループごとの座席を指定した上で、1回目から5回目までの授業を行った。グループ分けに当たっては、児童心理教育コースと幼児心理教育コースの学生が混ざるように配慮した。6回目から10回目までは、同様の条件でメンバーが異なるよう編成した第2次グループで授業を行った。11回目から14回目までは、同様の条件でメンバーが異なるよう編成した第3次グループで授業を行った。つまり、この授業全体を通して、学生は3つのグループに所属することとなった。

- ② 授業冒頭でのグループワーク

出席カードの配布または点呼による出席確認の後、授業の冒頭で以下のグループワークを行った。

1) 前回の授業から今日までに起こった印象的な出来事を話す

学生同士が交流を深めることを目的に「前回の授業から今日までに起こった印象的な出来事を話す」という活動を行う。具体的には、グループの学生にじゃんけんをさせ、勝った人から時計回りで話すこととしている。時間は全体で3分半ほど取っている。最初の頃は「1人30秒程度で」と指示しているが、時間管理は学生に任せている。したがって、時間内に全員が話し終えていないグループがかなりあるものと思われるが、特に介入は行っていない。

2) 前回の授業の復習

1)の終了後、グループで前回の授業の復習を行わせる。1)とは異なり流れについて筆者から指示することは特にしていない。時間についても、その時の学生の様子を見て、1分から2分程度と幅を持たせている。

③ 授業内容に関するグループワーク

授業内に1、2回程度、授業内容に関して意見交換をする時間を設けている。テーマは、できるだけ学生にとって身近に感じられるであろうものを提示している。本時においては、「学習性無気力」を取り上げた後、「学習性無気力で説明できる身近な具体例」をテーマに話し合わせた。

テーマによって話し合いが盛り上がる時とそうでない時とがあるが、このテーマはどちらかというと後者のようであった。たった今教わったばかりの概念を現実場面に当てはめると急に言われても、我々でも困ってしまうであろう。やはり、大学1年生にとっては少し難しかったかもしれない。

(2) 出席カードの活用

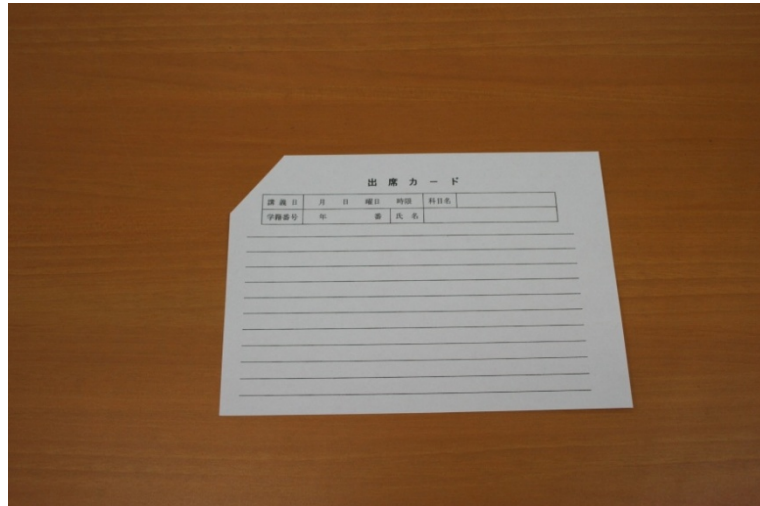
(3) 配布

原則としてすべての講義系科目で毎回「出席カード」を配布する。本授業のように受講者が多い大規模授業については、出席確認にも用いている。(出席確認の方法については後述する。)

写真のように、整理の便宜を図るために左上端をカットしたB6判の用紙の上部に授業日・時限、科目名、学年・学籍番号、氏名を書く欄があり、その下に10行分の罫線が引かれている。

大規模授業においては、授業開始のチャイムが鳴り終わるとともに、筆者が受講生一人ひとりに(午前の授業であれば)「おはようございます」と声をかけながら出席カードを手渡しする。小・中規模授業においては、出席カード記入の時間(後述)の直前に前から後ろへ送る形で配布していたが、「事前に配布してほしい」という要望が出されたため、5回目ぐらいの授業から大規模授業と同様授業のはじめに配布すること

としたはずであった。「はずであった」と言うのは、配布を忘れて結局元のように出席カード記入時直前に配布することが多かったからである。



出席カード

(4) 記入

授業終了前の5分程度を出席カード記入の時間としている。本授業であれば、10時25分頃、「今日の授業の感想、意見、質問、コメントなどを5行以上お書きください」と指示を行う。

なお、書き終わった者から解散とはしていない。7、8割の学生が書き終わった頃か、終業チャイムの直前に解散としている。

① 次回授業時における紹介

提出された出席カードは、次回の授業までに目を通すようにしている。そして、次回の授業で紹介するものを3名程度分ピックアップする。選ぶ基準は、比較的書いてある分量が多く、何らかの点でユニークな意見や感想が書かれたものである。

次回の授業では、グループワークで「前回の復習」を行った後、選んだ前回の出席カードを紹介する。内容を匿名で読み上げるとともに、筆者の視点で何らかのコメントを行う。

(5) 出席確認

筆者は「出席重視」を標榜している。したがって、出席確認は毎回行っている。

受講者50人程度までの小・中規模授業では、チャイムが鳴り終わるとともに、挨拶を行う。その後、受講者名簿を見ながらフルネームで名前を呼ぶ。学生には、「手を高く挙げて返事をする」ことを求めている。一通り呼び終わると、「いなかった人をも

う一回呼びます」と言って返事のなかった学生の名前を再度呼ぶ。公平を期すために、二度目の点呼が終わるまでに入室すれば出席としている。それ以降の入室は遅刻としている。

受講者 50 人程度以上の大規模授業では、原則として点呼はせず、出席カードの提出を持って出席としている。遅刻して最初に配布した出席カードを受け取っていない学生には、出席カード記入時に、遅刻の「チ」とサインをしたカードを手渡す。このカードを出した学生は遅刻扱いとしている。なお、本科目においては、4 回だけ点呼による出席確認を行った。

なお、遅刻 3 回に付き欠席 1 回としている。

(6) 時間厳守

筆者が授業行うに当たってもっとも重視しているのは、時間厳守である。

まず、授業開始時は、極力チャイムよりも前に教室に入室するようにしている。現在のところ、1 時限目および 3 時限目の授業についてはチャイム前入室の達成率は 8 割程度であろうか。1 時限目も授業のある 2 時限目については、達成率 5 割程度ではないかと思われる。

終了時刻については、前述の通り、① 7、8 割の学生が書き終わった頃か、② 終業チャイムの直前に解散としている。学生の立場を考慮し、どんなに遅くともチャイムと同時に終わるようにしている。

(7) 板書

近年、FD が義務化されたことにも伴い、多くの大学教員が自身の授業の改善に向けてさまざまな工夫を凝らしているのは周知の通りである。最近は特にプレゼンテーション用ソフト（パワーポイント）を用いた授業が増えているように感じられる。そのような中で、もはや板書などというものは古式騒然たる教育方法であって、工夫のうちには入らないのかもしれない。しかし、筆者は依然として板書中心の授業を行っており、またそれを大変気に入っている。

パワーポイントは、今や学会発表などでは欠かせないツールとなっている。短時間に多くの情報を視覚に訴える形で提示できるからである。筆者も、学会での発表やシンポジウム、一部の講演などでは大いに重宝している。一方で筆者は、1 回限りの学会発表や講演と授業とはまったく性格を異にするものだとも考えている。

筆者は、板書のメリットは「間」だと思っている。板書しながら授業をすることで、「間」が生まれる。筆者にとっては、授業を進めていく上で、この「間」がちょうど良いように感じられる。確かに、板書を用いるとその分進度が遅くなり、情報量も限られる。しかし、1 回限りの学会発表や講演と異なり、十数回にわたって行われる授

業においては、多くの情報を提示するよりも、適度な「間」があることで、学生の思考が促進されるのではないかと考えている。



第 14 回授業終了時の板書

参考までに、本時ではないが、第 14 回目授業終了時の板書を写真で示す。

(8) 課題——グループ学習を中心に

本来であれば、参観者の率直な感想やコメントからこそ、本授業の課題が浮かび上がってくるはずである。しかし、残念ながら参観者がなかったので、筆者自身が実践の中で感じている課題として、グループ学習に関する諸課題を問題提起するにとどめたい。

① 授業の冒頭に行う 2 つのグループワーク（出来事、前回の復習）を、ほぼ毎回 10 分弱程度の時間を割いて行った。貴重な授業時間を割いて行うだけの意義が果たしてあるのかどうか、検討に値するものと思われる。

② グループ学習については今年度初めて導入したため、授業内容に関するグループワークについては、必ずしも計画的に行われたものでないことを告白せざるを得ない。今後もグループ学習を継続するのであれば、グループワークに関するしっかりとした授業計画が必要であることは言うまでもあるまい。

③ 授業アンケートの自由記述欄にグループ学習についての感想や意見を求めたところ、「知らない学生と仲良くなれて良かった」「他の学生の意見が聞けて視野が広がった」などという肯定的な意見が多かったのは事実である。しかし、果たしてこの授業形態が学生にどのような影響を及ぼすのかについては、比較的長い時間をかけて検証

することが求められるように思われる。

5 授業公開についての感想、意見

各教員わずか1、2時間であったとは言え、6人もの教員が自身の授業を公開したことは、本学、少なくとも越谷キャンパスのFD活動にとっての小さな一歩となったことは間違いあるまい。結果として参観者がきわめて少数であったというのは残念ではあったが、初めての試みであり、さまざまな条件整備が不十分であったことを考えると、致し方ないことと考えられよう。

おそらく他の著者も指摘していることと思われるが、今回の結果を失敗ととらえるのではなく、次の一歩を歩み出すための具体的な方策を考えることが、今求められているように思われる。そして、わずかずつではあってもこの歩みを前進させることが、学生に対する教育サービスの向上へと連なり、ひいては大学の社会的評価を高めることにも結びつくと思われたい。

<引用文献>

- Johnson,D.W., Johnson,R.T. & Smith,K.A.(1991). *Active Learning: Cooperation in the College Classroom*. Edina,MN : Interaction Book Company. (関田一彦 (監訳) (2001). 学生参加型の大学授業 玉川大学出版部)
- 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ (編) (2004). 大学授業を活性化する方法 玉川大学出版部

常葉学園大学公開授業日参観の記録

平 沢 茂

(教育学部教授・教育研究所所長)

昨年 11 月 12 日、常葉学園大学の公開授業の参観のため、常葉学園大学を訪問した。同学における公開授業は、この日が 2 度目である。1 度目は、2007 年 11 月 14 日に開催された。

F D の様々な取り組みの中で、とりわけ授業公開が学生による授業評価等に比して、授業改善に対してより直接的で効果的な取り組みであることはよく知られている。しかしながら、授業公開に抵抗感を持つ大学教員が多いこともまたよく知られた事実である。いや、有り体に言えば、F D ・授業改善そのものに関して認識が薄い教員や抵抗感を持つ教員が少なくないのが実態である。

そうした状況の中で、全教員参加による授業公開に踏み出したのは、同学が最初である。ここに至る経緯は、昨年度発行の報告書で述べた。念のため、ここで簡潔にその経緯を振り返っておこう。

1. 全学公開授業日設定に至る経緯

(1) 「授業方法研究・改善委員会」設置

同学に F D 推進のための「授業方法研究・改善委員会」（以下、F D 委員会）が設置されたのは 2002 年度である。F D 委員会がまず課題としたのは、F D に関する教員の意識改革である。上述したとおり、F D ・授業改善に対して認識の薄い教員や抵抗感を持つ教員に、F D ・授業改善の意識を高め、あるいは抵抗感を除く取り組みがまずは必要との判断である。

① 初年（2002）度の取り組み……「学生モニター会議」の設置である。「学生モニター会議」は、教員と学生とが同席して、授業に関しての意見交換をする公式の場である。出席が義務づけられたわけではなかったから、出席した教員は少なかった。しかし、出席した教員には、予想以上に大きなインパクトがあったという。実は、学生によるアンケート方式の教員評価よりも、教員と学生とが同席して授業に関する意見交換をする方が授業改善に効果があるとの見解もあり、相応の成果を上げたことは想像に難くない。しかし、教員全体の意識改革には、この方法では限界がある。

② 2003 年度の取り組み……F D 委員会委員による公開授業の実施。参観教員は少

なかった。しかし、教員相互の授業改善への意見交換は刺激があった。

③ 2004 年度の取り組み……FD 委員会委員の担当科目は常時公開とする。

④ 2005 年度の取り組み……2005 年度には、2 つの取り組みが始まっている。1 つは、全教員の全科目を常時公開授業とする取り組みである。もう 1 つは、**ストリーミング配信を活用した授業公開の準備**である。

前者の取り組みでは、授業を他の教員に見られる可能性があるとの意識が、全教員に植え付けられたことは確かであろう。とは言え、実際に他教員の授業を参観する教員が多くなかったことは確かであろう。自分の授業を他教員に見られたり、他教員の授業を見たりすることに対する心理的な抵抗は簡単に除かれるものではない。

また、他教員の授業を参観するために、授業日以外の日に大学に出向く教員は少ないであろうし、自分の授業のある日は、他教員の授業を見る時間的余裕はないであろう。他教員の通常の授業を参観するには、心理的にも、物理的にも壁があるということである。

そこで、第 2 の取り組みが計画され、その準備に入ったのである。ある教員の授業を録画し、ストリーミング配信する試みである。授業中の教室に足を運ぶのは先に述べた心理的・物理的な障壁がある。しかし、ストリーミング配信される授業なら、自分の研究室で見ることが出来る。この年はその準備が進められたのである。

⑤ 2006 年度の取り組み……ストリーミング配信を活用した授業公開の実施。前年度に準備されたストリーミング配信を活用した授業公開が、実施に移された。収録し、配信する授業は、90 分の授業をまるまる収録・配信するのではない。提案（他教員からの意見を聞きたいと考えている）部分に的を絞り、気楽に見られるよう、1 タイトルの授業は、10 分程度に編集する。2006 年度は、提案内容を「学習意欲と目的意識を高める効果的な導入の在り方」とし、14 本の動画コンテンツを作成、配信を開始した。

⑥ 2007 年度の取り組み……この年は、2 つの取り組みが進められた。1 つは、ストリーミング配信を活用した授業公開が継続された。もう 1 つが、全教員参加による公開授業の実施である。

1 つめのストリーミング配信を活用した授業公開の成果は、FD 委員会によって次のように報告されている。

「2006 年 10 月の学内配信から 2008 年 1 月末日までの視聴回数（累計）は 1146 となっている。学内のみの配信であることと常勤教員数（受信可能な研究・室数）を考慮すると、ある程度の有効性が推察される。

また、コンテンツ視聴後に届いた感想の中には、「委員以外でも公開することは可能か」「次はぜひ私の講義を公開授業として録画して欲しい」「大人数の講義の実態

を配信して現状を理解してもらいたい」等、様々な観点から「授業公開に対する積極的な参加意志」を見ることができる。委員だけでは十分な対応ができない状況ではあるが、本学教員の意識が改革されている成果のひとつである」（常葉学園大学 授業方法研究・改善委員会編『常葉学園大学の授業改善』2008年3月）

2つめの全教員参加による公開授業は、2007年11月14日に通常の授業を休講にして次のような内容と日程で進められた。

- ① FD委員会の委員による提案授業(10:00～11:00)
- ② 委員以外の教員による公開授業(11:20～12:20)
- ③ 分科会 (13:20～14:20)

①～③とも学科別（6学科）の授業、分科会が設定されており、教員は自分の所属する学科の授業、分科会に出席したのだという。提案授業、公開授業とも、60分なので、通常の授業枠より短くなっている。

2. 2008年度授業研究公開授業

2008年度も、2007年度に引き続き、全教員参加による公開授業日が設定された。昨年2月に訪問した折、2度目となる2008年度の公開授業日の参観を申し入れたところ、副学長・角替教授と、担当の小田切教授が快くそれを了承してくれていたもので、予定日少し前にお願いの電話を入れ、今回の参観となった。

当日、小田切教授は、主催者側責任者として運營業務が多忙なので、代わって猿田准教授にご案内いただくこととなった。猿田准教授も、同学授業方法研究・改善委員会の一員として運営に携わる立場にある。しかし、外来参観者の私のためにご案内役を引き受けてくださった。

公開授業は10時開始なので、9時過ぎに同学に到着し、猿田准教授の部屋を訪ねた。ご用意いただいた資料をもとに、参観の仕方について、打ち合わせをした。その結果、今回の参観の目的が公開授業の全体を把握することなので、駆け足（各授業とも7～8分程度）で全授業を見せてもらう選択をし、猿田准教授をお願いをした。

（1）今年度のプログラム

そのご報告にはいる前に、昨年度のプログラムと、今年度のプログラムに若干の相違があるので、そのことを見ておきたい。今年度のプログラムは次頁に掲げたとおりである。

常 葉 学 園 大 学

平成 20 年度

授業研究公開授業日

公開授業（特別日課 10:00-11:00）

教 員 名	開 講 科 自 名	開 講 教 室
鈴木 三平先生 海野くに子先生 星野 洋美先生	総 合 演 習	3号館3302教室
望月 好徳先生	特 別 活 動	本館 601教室
渋谷 恵 先生	社会教育計画特講	本館 418教室
加藤 敏之先生	教育心理学	3号館3418教室
長谷川晶子先生	communicative Writing I-B、Cクラス	本館 803教室
谷 誠司先生	対照・誤用分析一日韓B	3号館3419教室
安武 伸朗先生	インフォメーション・デザインC	3号館3517教室

※授業開始5分前までに各教室へのご移動をお願いします。

全体会（委員からの提案 11:20-12:10）

※2号館2階大会議室へのご移動をお願いします。

平成20年11月12日（水）

主催：常葉学園大学／常葉学園大学授業方法研究・改善委員会

前述したように、2007 年度のプログラムは、次の 3 部構成であった。

- ① F D 委員会の委員による提案授業(10:00～11:00)
- ② 委員以外の教員による公開授業(11:20～12:20)
- ③ 分科会 (13:20～14:20)

これに対し、2008 年度のプログラムは、以下の 2 部構成となっている。

- ① 公開授業 (10:00～11:00)
- ② 全体会 (11:20～13:10)

授業が 2 部構成から、1 部構成になった理由は、概ね次のようなものではないかと思われる。すなわち、初年度は、公開授業日のねらいを明らかにする意味で、F D 委員による授業をする必要があるとの判断があったのではないかということである。

分科会が全体会に置き換えられた理由は、1 つは、分科会だと全体の状況が把握できないということと、もう 1 つは、3 回目以降の公開授業日やその他の授業改善の取り組みについて、F D 委員会の考えを全教員に伝えたいということではないかと思われる。ちなみに、当日の参加教員数は、学会等で参加できなかった一部の教員を除いてほぼ全員であった。

では、当日の、概要をご報告しよう。それぞれ授業が、どのように行われていたかをご報告するのは、60 分の授業の中の 7 ～ 8 分のみを見たわけだし、また、紙数の関係から言っても無理なので、いくつかの視点から。公開授業全体がどのようなものであったのかをご報告したい。

(2) 公開授業日の参観用配布資料

配布された資料は、その授業全体に関するものと、公開授業当日の授業に関するものが用意されていた。前者は、いわゆるシラバスであり、後者は、いわゆる指導案ということになろう。それぞれは A 4、1 頁にプリントされている。

まず、授業全体の構造、いわゆるシラバスの構成は以下の通りで、一般的なものである。

- ① 授業科目の目的と概要
- ② 授業計画と内容
- ③ 評価方法
- ④ 教科書
- ⑤ 参考書
- ⑦ 備考

一方、本時の授業に関するいわゆる指導案は、小学校や中学校ではおなじみである。

しかし、大学の授業で指導案が用意されることはまずないであろう。

構成は次のようになっている。

- ① 本時の目標
- ② 本時の内容
- ② 本時の展開
- ④ 本時の評価（参観の視点）

記述の仕方については、個々の教員に任されている。たとえば、目標について言えば、それが目標行動で書かれているものもあれば、従来型の記述方式で書かれたものもある。このあたりは、授業設計そのものに関する評価や認知の問題もあるから、統一することはまず無理であろう。このようなことも考慮して、2つの科目について、指導案を掲載しておこう（pp. 65～66）。

以上の他、各授業において使用されるハンドアウト等が、各教室に用意されていた。このあたりは、小学校等の研究授業と同様であった。

（3）授業者、学生、参観教員の様子

各授業の教室には、それぞれ、数人から十数人の参観教員がいた。

授業者の教員、学生とも、気負った様子もなければ必要以上に緊張している様子もなく、普段どおりの授業が行われていた。

参観している教員の様子は、資料を参照しながら、またメモを取りながら、それぞれ熱心に参観していた。居眠りをしている教員は、私の見た限り1人もいなかった。また、おつきあいで仕方なく見ているということもなく、それぞれ、関心を持って参観している様子が見て取れた。

3. 全体会

公開授業終了後、20分の休憩を挟んで、11:20からは全体会がもたれた。残念ながら、私は、午後の大学院教授会に出席するため、12時少し前に、中座しなければならなかったもので、全てをご報告することができない。まず、FD委員会の活動のこれまでの経過と今後の活動との報告に始まった。ここでは、FDの重要性と、同学におけるFD、とりわけ、公開授業の意義やその在り方が、説かれていた。それが終わって、参加教員からの質問や意見交換が始まるころ、中座を余儀なくされ、後ろ髪を引かれる思いで、同学を後にした。しかし、いずれ、このことについて、何らかの形で情報を入手し、ご報告したいと願っている。

4. その他、雑感

同学の全教員参加による公開授業は、FD委員会による時間をかけた積み重ねの他、同学に固有の様々な条件がかみ合っただけで可能になったもので、他大学がすぐにこれをまねることはとうてい無理であろう。しかし、これに近いたちでの研究授業や授業公開を進める大学は増加しつつあり、大学におけるこの流れは、やがて加速されるに相違ない。

そのとき、本学はどうするのか。十分な準備なく急流に押し流されれば、行く末は概ね予想がつく。一方、流れを読み切れず、中州に残されれば、これまた、その行く末は見えている。どちらも、避けたい。流れを読み、流れをとらえて、流れに乗る、これが上策というものだろう。このことについては、まえがきで述べているので、ここでは重複を避けておこう。

さて、同学の公開授業を見て、もう1つ、あらためて気づいたことがある。授業条件の重要性である。クラス・サイズや持ちコマの問題などの条件とともに、物的条件の重要性にあらためて気づかされた。6つの授業の中で、小規模クラスの授業で、グループ・ワークをする場面があった。そこで、気づいたことである。

レイアウトが自在に変えられる教室がいくつもあるのである。机や椅子は可動性を考慮して選ばれており、活動内容に応じて、どのようなレイアウトも可能にしている。もとより、現代の大学で、もはや当たり前になった多様なメディア、特にICTに係るメディアの使い勝手の良さそうなこと、垂涎の的とはこういうことを言うのであろう。

これで、教員が授業力をつけたら、同学は、手強い競争相手になることは間違いない。静岡県教育界における同学の評価は日増しに高まっていることはよく知られている。本学の行く末を考えたとき、刺激されることの多い大学である。